

和平先锋  
日本问题  
特辑

1944.1:3-4

後する社告。

なる名稱に關し、愛  
より種々御懇切なる御教示是  
本理事會にて評議の結果、我々  
孰したるの仕務を有するに鑑み本  
「和平先鋒」なる名稱に變更致し  
し、此段御通知まで。

國三十二年一月一日

和平先鋒社。

紙

新著之辞

頭言

カイロ下へラシ會談と日本人民

人民反動革命自衛隊の部成立の通氣と機密

青木榮助(二三)

平田純(二六)

赤水鋼(二七)

秋山兼一(三三)

山名義典(三五)

近川洋

真壁順(三)

藤川敏(四)

林養吉(五)

門の後の

隨想(詩) 柳田泉(五)

日語抜抄 伊藤界一(四)

戦火を越えて 山名義典(四六)

其の記録 近川洋(四七)

ふたし(四九) 藤川敏(五〇)

和年材便り 本社記者(五七)

新編年廣吉 近川洋(五八)

編輯後記 近川洋(五八)

社名 近川洋(五八)

祝勝利年 英敬儀

同盟國作戰勝利之日、即

世界永久和平降臨之時、

四國宣言已纂就和平基

礎兩次三領袖會議更策

定勝利方略一九四四年

為同盟國家之勝利年、

本列於今年元旦改名和

平元年、祝同盟國勝利

之年、實為和平之速臨、

民國三十三年元旦

勝利の年と祝す

同盟國作戰勝利の日、これ即

ち世界永久和平降臨の時を

り、四國宣言は既に和平基

礎を築き、兩次の三領袖會議は

更に勝利の戦略を策定す、一

九四四年、この年こそ同盟國

勝利の年なり、

この年の元旦、本誌は和平先

鋒と名を改む、蓋し同盟國の

勝利の速やかなりにして、世界和

平實現の速きを祝ふなり、

民國三十三年元旦

立見譯

勝利の旗は輝く！

カイトロドヘランの之國會歌は何か？

それは白昼夢野郎の政治的勝利の凱歌である  
是れは決して理由なき強権の征服の西遊記である。弱々とし

てしき強の生存と繁榮は保証された

好悪なる征服者。片腕は勝河の河魁となつた。

日米全同胞よ！ 祖國は亡びぬつた

亡びぬつたのは軍事機密権力だけである

祖國の救済と生存と願ふ者は立て！

立てて。軍事機密権力と闘へ！

遂して勝利を持つ者よ！ 此の事には死して

奮闘と行動。此の事に死してのみ

祖國と人民の將來は保証される。

日米諸君！ 一九四四年

此の年こそ、日本人長の義勇起の年たらうのよ！

とらうのよ！

とらうのよ！





國粹 英政風

# カイロドヘラン會議と日本人民

林長吉

英米露三國局長のモスコ會議が相互の諒解一致を獲得し圓滿なる結末を告げて一ヶ月過ぎた十二月五日カイロに於て將参員長ルイスワエルト總統チヤール首相の五國領袖會議が行はれ、已に遠東問題に於いて協定が成立したることを報じた。と同時に又も盟友イラン主都トヘランに於てルイスワエルト總統チヤール首相スチーヴン参員長の三國盟國領袖會議が行はれ、ドヘラン會議に依つて、已に英米露の完全なる諒解と協定が成立したることを報じた。此の三國領袖會議は已にモスコ會議の結核の實質を尙も疑人々の均しく噂せられ、露望されいゝ面をどうしてあつたか、果然此等宣言を懸しようとするに同時に一矢センチシモンを奪ふ能はた、では此の三國領袖會議は如何に決定されたか。

先づカイロ會議はワシントン宣言の、事小まを違ふべく、それは日本軍事チヤースト對する増大の開始を約束したものである。已に公報の全文が發表された。周知の事と思ふが、その詳細を著述を避けるが、兎に角報載によつて知り得る點、其の要約は、次の如くである。

一、先づ、今次戰爭によつて擧げられたところのピルマシヤム、マレ、越南、香港等の領土を奪取し、これを返還しなげればならぬことは勿論、前大戦中に巧妙に取らば、

六日本がこれまで、つまり、露國に取つた上、露國の満洲、朝鮮、南洋の各島を露國の所屬にすべし、  
以下、優待してある華北、華中、華南より無條件に撤兵せし、彼等の暴政下より解放する  
と言ふこと、而して適當な時期に存しては朝鮮の独立を保証すると云ふことと決定。

五、五大國は、決して自己の利益を顧みず、領土拡張の意志なきことを聲明、五大  
盟國は以上の目標に向て、その他の對日條約の聯合目標と同一致して我暴を敢て對し  
海陸空五方面より不斷の圧力を加へ、以て日本軍事フアシストの無條件撤兵を遂  
得せしむるとするものがある。と言ふことである。

次にドペレン會議に於ける露國の宣言によつて知り得ることには五大盟國の共同致  
策、露國は及かぬ心強強五格すナス、ヒットラーを露國化する軍事協定が成立、それは  
將來東西南三方面より發動されると言ふことである。その軍事行動の範圍は時期によつて  
は無論公表はしないが、既に此の點に就て協議して致し、露國は獲得したと云ふことである。相互  
共同諒解によつて勝利は既に吾人の手にあることを保證された。特に暴政と奴僕、圧  
迫と偏執を消滅せんと怒する大小國家の積極的に我々の陣線への参加を希望され  
てある。

以上によつてその會議に於ける決議要旨は大體相むむことと云ふべきであると思ふ。以上によつて  
我々が知り得ることは、此のニツケ會議に於ては、當面の既露露を以て討議されたは  
かたなく、以後の問題は固くして種々討議され、相互の一致を獲得したと云ふことである。  
これによつて信じて得ることは偉大なる勝利はルーカヴェルト、チヤアナル、ヌイリと宣言中にもあ  
る如く、既に「吾人」即ち同盟國家のものであると言ふことである。それは丁度、ドヘレン重  
月六日各報電に傳へるところの會議中赤軍領袖チヤアナルが既野生を祝して乾杯する時  
「勝利は既に過ぎ、我々の手にはなかり、露國は今後如何に我々を露國化するかが問題である。」

見よ。想定の如き戦争の及ぶ所は、先づ東洋に於ては、日本に於ては、  
 イタリヤとフランスとの直接ドイツの被撃を感得する英米カナダの軍の反響、盟国空軍の  
 ナチス兵隊の操縦、かかる盟軍の包圍鐵滅既と、それに加ふるバルカン小國の反ナチス遊  
 撃軍の活躍、最近のネーデルラント、ポーランド等の反ナチス人民解放軍の甚だしき展  
 開は、今やナチスドイツを逐て、致命的瓦解に陥入れてある。

一方遠東の事は如何の。過去我々の會議に於ては、ワシントン會議を軸として、英  
 米蘇の作戦目標は一貫して、先づヒットラーと共謀し、彼を後日本を解決するに云ふ戦  
 略であつた。故に遠東戰場は目前比較的穩定を現してゐた。然し今更なるナチスは對日作  
 戦問題が切實な考へ出つてゐることが周知の如く、今次會議の過程中には露骨に物言つ  
 てゐる。と言ふことは、政洲に於ける勝利が已に「過去のもの」となつたことを表示するものであ  
 る。

何れにしても、盟軍の對日全面攻撃の開始は近日に於ては、日本軍も予て  
 壊れ又露前に迫つてゐると言ふことは疑ひなき事實である。かかる彼等もその事を認め、  
 盟軍の反攻の備えんとする異常なる焦りを見せ、凡ゆるるに備へてゐる。今や東洋は國內を軍需工場化さ  
 せ、生産と國民の動搖を抑制せんとする焦りである。今や東洋は國內を軍需工場化さ  
 せ、餓死の悲境を準備を強要してゐる。一方又東洋促進の完成のために非人間的労働  
 を強要してゐる。凡そ國民は已に誰が戦争の精進者であり、誰が自由と幸福を享受す  
 るに、誰れが國內を軍需工場化の生活に陥入るかを此の長期の戦争の苦痛の中より  
 痛切に感じ、彼等の戦争に對する不満、反戦、厭戦論は日甚しき増大となつてゐる。  
 已に在華に於ける日本人民の反戦運動が日甚しき増大されてゐる。この事實は、その積極な  
 る証明である。

かかる情勢に在る時、カイロ、ドヘラン會議の行合は、東洋露日大盟國の相互諒解を



我々が指摘しなすれぬものは、ルーズベルトがテヘランに於ける  
會議である。これこそ英米蘇ドヘラン會議の建議を裏切つてドヘラン會議中の  
問題の、の具體的決定がなされたものなすれぬことを認むべきである。會議が  
決定したることは、解かることは、東部地中海方面より、対ソトラ反意戦が正に展開  
せらるであらうと云ふことである。最近ロンドン二十日ラヂオによると、ブル  
グリアは内閣を改組し、  
軸心よりの脱離を圖つてゐると云ふ。又トルガリアトルコ辺境に於てはトルコ軍と独軍が衝突  
を起したと傳えられてゐる。未だ詳細なる死傷の眞は証実されてゐないが、これが盟  
軍の反攻の發端となる可能は充分に見受けられる。

同様のことゝが遠東に於ても言ひ得る。三月二十日珍珠港攻撃を以て米大爆撃機編隊  
は八日南度マニラ群島の日軍陣地を襲撃したと傳えられる。又アガタ島に於ても日  
米軍は已に新飛行場を建設したと傳えられ、得來此の方面から大空軍攻撃勢が展開され  
るであらう。殊にマニラの襲撃は日軍の唯一の南方保壁であるが故に、日本人心の動搖  
は極めて大であらう。又一方中國戦場の常徳外圍に於ける日軍の残敗は已に中國軍の總反  
攻の機に東するであらう。

此處に於て我々の金ツ指摘しなすれぬことは、ある攻勢が行はれると同時に對日宣傳  
を配合して行はなすれぬことである。なすれぬは日本人民は確に上述した如く、誰が人民  
の敵であるかを確信してゐる。然し彼らも、買収の國だ。食糧を奪はれると云ふ支配者  
の宣傳が頭腦に侵透して居り、それが彼らの行動を躊躇せし、軍事的独裁権の下に官位を  
せらるゝのである。かゝる危懼を彼らの心頭より消除することが出来るなら、日本人民は當然  
同盟國側の目標に提携し、中國の抗戦に協力し、日本軍を予シストと視、都より致命的瓦  
解に從事するであらう。なすれぬは、

在華回本人民反戰同盟西南省部成立四週年紀念

於二月二十三日、この日は我々在華回本人民にとりて忘れぬことのある多岐の  
紀念日である。日本軍事ファシズムの侵襲對壘戰爭に敢て奮起した中華全  
族の抗戰陣營に、日本人民の革命團體の參加が初めて公認され、鹿地直に領  
導された抗戰兵士十數名が四年前の今日、桂林に在る日本人民反戰同盟西南  
支部を結成した意義ある日である。

世界の動勢は今日、一九四四年の總決算を目前にして決定的な段階に到達  
してゐる。この藝榎はイタリ、歐戰後歐洲に於ては、以て疾風迅雷の偉大な反  
攻と異米の空中大進攻は其屬してドイツを以て包圍圈内に追ひ込め、糾々と自  
派を退りつゝあり、遠東ファシストは依然として侵襲の泥沼に半身を没しつ  
、北方、太平洋上に於て米海空軍の果敢な反撃にその外防を失つ、彼が  
本土を威脅せらるゝ危機に陥つてゐる、一言に之を言へば、全世界人民の反  
ファシズム闘争の怒濤の前に逃げ場を失つた形勢を察せ、彼等異國今日の姿を  
ある。

我々は、かゝる全世界反ファシズム團結の勝利の前途、遠東人民光榮の解放  
と進んで、その有力な團結の基礎として主謀せる同盟の意義と任務は多に  
ほゞ光輝を放つてきたことはたゞいと確信する。

狂暴ファシストの奴隸東亞建設の野望のたのみに、既に四週に日本人民の志が  
滅され、中國の幾千萬の人民が殺戮と飢饉とに罹り、其の上更に全世界

止。被害者を救出する任務を帯びて先登と上りた本同盟の成立は、その當初は  
徹々たる存続であつたにも拘らずその歴史的使命と敢然と遂行した。即ち嘗  
時日本軍は南京侵入は妨げられず、早く昆崙山の防線に敵前工作隊を派遣し  
て、対敵宣傳工作に終々たる功績を挙げ、日本人民の中國抗戦への協力を  
身と以つて顯示した。

越えて一九四〇年七月、重慶に同盟總部が正式に結成された。それ以來の数年の間  
諸工作は、偉大な効果と上げ、中國全民族の理解と友情を果したばかりでなく、全世界  
の反侵略人民と諸國間に日本人民の反侵略闘争の量と深く認識させ、新たな信望を  
獲得した。

この間、かゝる偉大な任務の基礎を奠定したのは、貴に侵略軍隊の修治を身と以  
つた所、戦じた反戦兵士の一團と、過去日本国内に於て十数年間、人民の敵に對し  
る闘争に益々活きて来た革命戦士、彼等が成し遂げたことである。

一九四一年六月のナチスドイツの野蠻進攻と、十二月の日本軍事ファシ  
ストの本平洋流の突動は、新たな規模と大にする戦雲を以つて全球を震つた。こ  
のことによつて、全人類の反ファシズム闘争の團結は急速に進展し、従つて中國抗  
戦と聯とする遠東反ファシズム優位の重要性はまた強化し、日本人民と遠東諸民  
族の共同の敵に對する協力が益々強くなり、阿盟は、かゝる日本人民と遠東  
諸民族の強かな組織として、その任務を果して来たし、將來もその努力を繼續する貴力  
を拡大して来たのである。

吾々の今日、遠東ファシストの崩潰を前にして、次の如き事實を顯うかにするこ  
とが出来来る。

第一、日本帝國主義の機械は今、貴者以來、急速にその阿盟の崩潰を

此國を以て決戦の場なりとの高壓的威嚇手段を以て臨んでゐること。

第二矣。國內及び被佔領地の人民は戦争のために凡ゆる物資を奪はれ飢饉地獄に突き陥されてをり。このことかや戦争に反対する全人民の激憤を以て軍閥争の普遍化してゐること。

第三矣。侵略軍隊内の兵士の反戦・厭戦気運が湧起し拡大之れつゝあり、軍指揮系統を擾亂し、疲弊せしめて向ふこと。

如上のことは、日本軍事ファシストと人民とが決戦を明日に迫られてゐることを證實するに他なからず、かゝる日本人民の同歩拡大運動こそ、侵略者の最後の止むべきを刺す決定的力量たることと亦無難に言へば可いことだらう。

同胞諸君！中国の友人諸君！全世界及ファシスト同盟国友人諸君！

吾々は、る日本人民の反軍閥争の海外に於ける分遣隊として、諸君の勇力と支持とを切に希望する。

同盟は四年以前の同盟ではなからず、今日その影向は在華敵愾の日本兵士を驚愕させて廣汎な反戦兵士によつて之を支持すべしとせり。この中心力量は諸君の団結と將來の進歩とに於ては無敵であることと諸君に断言する。

英、米、中、ソを主とする全世界反ファシズム陣列の来るべき新巻の連反政の衝鋒隊をスゴロ、カイロ、バド、ヘラン等に於ける盟国に互を會議によつて今日既に決定された。

吾々は遠東諸民族の共同敵、日本軍事ファシズム紅團のたの、凡ゆる人類の忠告と使節と使節戦争終滅の目的、最後の全人類勝利のため、諸君と共に死とかりて闘ふことを宣言する。

一九四三年拾二月二十三日

植民地解放闘争

特 輯

日 本 問 題

臨時議會と日本の将来

青木純太郎

日本を再認識せよ

平田 純

大軍需省を曝く

木水 潤

国内労働者の鬥争と其の昇格

松山 龍一

日本フアツシヨ農村政策と農民の動向

田 中 達

日本理化学研究所の動向に付て

山 名 敏夫

日本農民大衆に徴す

吾妻 耕人

# 臨時議會と日本の將來

清水稔太郎

本年十月二十五日、日本軍部は又も臨時議會を召集し日本人民に非常を警告してゐる。本年申定期とも三回目である。

何故かや日本軍部は度々議會を開かぬはさうぬのかや、かうした疑問が私達の胸に当然起つて来る。

確實に我が國が得ることは國際情勢の發展が日本軍部に對して致命的打撃をあたへてゐる事と、歐戰の危機に直面してゐるといふ事である。

歐戰日本軍部は中國事變及び大東亞戰爭初期に於ける本意打撃の急襲により一掃の實績を獲得するに成功した。だが然しそれは決して日本の軍事力量に決定的力量を与へたものではない。所望とはるが獲得せざる資源を戦争に投入しめるには本國重工業地區への輸送が必要である。此の輸送情況は昨年頃より全く困難となり、儘かに朝鮮と日本近海を結ぶ

線が幸じて確保されておりました。それさへも時折りは米潛航艇のために妨害され、中には海中に葬り去られてゐる様な情況である。最近米所した者が言つてゐる。

これらの輸送情況は日本軍部の戦争力量を全く絶望的不安を与へてゐる事を明らかに物語つてゐる。

次に人的方面はどうかと云へば先に施行した職命令を更に昨午下りして拡大して未婚有期の男女から少年まで徹底的に徴用し、遂に滿洲や南洋の軍需工場、又は陸軍の軍事監獄へ送り込み、本國をもち此の種の軍事監獄北に、そのための色々不悉な事は、毎日の新聞紙に表れてゐる。それは如何に支配階級がかくさうとして、税關を嚴重に、しても言ひ佐くに全國に知られ、三歳の兒童を知つてゐると云ふ程である。又本年八月に至り、政府機関員三〇パーセント、軍事力に

かしてゐるが然し、年々壯下は減退し、軍事は九  
大陸に或は南洋に先鋒を演進せしむれば、尚  
次々と動員せられ、ある事、或はさなきに  
産率底下の折柄、その難の不見、至令、決定  
付打てゐる。如何に軍部が焦つても少平や  
婦女子の生産力、正は如何とし、なほ難い現況  
にある。

かくの如き、戦争力量の絶望的、不安から  
日本軍部は必死になつて、酷使と殺戮の血  
刀を振るつて、日本人民に挑みかゝつてゐる。

此の事実は再々の臨事議会に於て、王英々  
大さく明陳になつて来た。最もその主要な  
もの増徴と、時別法である。

増徴は既に戦争を強行する、便義主義軍  
部の一茶飯事となつてしまつた。過去幾十  
年間、特に最近次々と増徴される増徴は正に  
人民の最後の血の一滴を呑みほさんとし、戦  
時別法特別法によつて、人民は最早、戦争に対

して、もの一言、小事も出来なく、なり、物質機  
能に對する野分の不平等も直ちに穿徹し、危  
味する情態におかれ、ゐる。

14 當つて東條政権の主要なる推進力である  
急進的少壯派軍人、少日本軍部の要質

により、附ち金、財、物、を失ひ、政權に對  
の世に、その政治的、経済的、政治的、對  
する、權利を奪はれ、その及、動員、後、等、少  
は、軍人、等、と、明若に於ける、民権獲得へ  
の、方針、等、志、した、不平等の、武士階級、の、役割を  
是、を、せん、と、も、せ、る。

かくの如き、國內に於ける、急進力、と、志、配  
を、受ける、者、王、英、則、す、も、誠、は、日、一、日、と、明、陳  
となり、その、急、進、を、受ける、人民は、各、層、に、わ  
たつて、その、所、へ、得る、限度、を、刺、せ、し、め、つ  
、ある、此、の、耐、え、得る、限度、を、刺、せ、し、め、つ、

熱烈に、その、生存、を、兵、過、され、感、骨、され、た、個  
體、に、於いて、爆、発、し、起、す、の、う、ち、に、そ、れ、は、

全國、を、震、動、す、る、事、の、火、の、油、と、化、す、て、あ  
らう。

更に、其、は、戦、争、を、起、して、日本、軍、部、の、動、員、下  
に、押、し、し、る、占、領、地、區、の、東、亞、民、衆、と、各、種、民  
地、の、人、民、の、情、態、を、考、察、し、て、見、や、う。

日本、軍、部、は、親、政、と、か、王、道、樂、土、と、か、云、つ  
て、宣、伝、を、行、つ、る、が、各、占、領、地、區、の、中、國、民  
衆、に、對、する、日本、軍、部、の、專、横、と、圧、迫、は、全  
く、王、族、の、兒、童、し、知、る、所、の、事、実、と、あ、る。  
これ、に、對、して、は、中、國、民、衆、は、特、自、隊、と、連、絡

移送や積極に積極的の活動に日本軍は  
まし威嚇してゐる。特に此の種の斗争は  
清洲に於いて盛衰である。

朝鮮、台湾に於いても民族自決を叫ぶが  
民族の力は高まり、正に朝鮮に於ける  
民族は在華朝鮮義勇隊の活躍と、  
鮮内の労働者のストライキ暴動は相呼応し  
て斗争する及侵暴の量の中に表示さ  
れてゐる。

前記の如く南洋に於ける民族独立の斗争  
は中国軍の進軍に日本軍都打倒の方向  
と進展し、南洋諸島に於けるも亦  
南洋軍の勝利の前途に依り民族運動  
も激し、これ等は既に日本軍都打倒  
の勝利に於て、具體的侵暴の力量とさ  
つて表示してゐる。

南洋の各地域上に於ては既に法外に  
侵暴を起す一寸の土地を残さぬといふ  
と同様に日本軍都打倒は断じて疑か余  
地を致してゐないといふのである。か  
るる危境から  
来る日本軍都の焦標は再々の臨時議  
会と

なり、天を最後の時

性の血潮が溢れ、それ程深く大に日  
後身の憂慮は深まり進んで来る。  
復讐の苦悶が深まれば深まる程神國は  
その正体は露れ、聖戦は化けの皮を剥ぎ取  
られ工打ち。そして人民はそれ等が復讐の  
利益を享受せしめてつうとつうに迷信を  
ある事に導かれ工打ち。これこそ日本天皇  
の権力の崩壊であり、打倒天皇制の前提で  
ある。之が、も具體的事実が日本人民を指導  
する事、これが我々の最も日本の確立と勝  
利の條件と成るといふことは、明らかに知り  
得られる。

無論、これは直ちに日本人民の自由と幸福  
を意味してゐない、寧ろ戦後の人民生  
活の精神的混乱の抑へ極度に切りつめら  
れるであらう。だからこそ、我々は急遽な  
る人民生活の安定と、その要求の心の満足  
を以て斗争し、しななければならぬのである  
か、してこそ日本支配階級は甲乙の差動  
を粉砕し得るし、人民を我々の側に引き取  
り、最高の事業を完成することになる。

6



# 日東を再認識せよ

早田 松

日東戦に於ける夫々の心境

日東戦に於ける夫々の心境。新開地に於ける戦術を明かにし、戦術の進歩に於ける兵士の堅持の思想に、戦争の

本日は日本が勝つたので、勝つてゐる軍隊は、云ふまいと云ふことである。この戦争を前に私は、若くは得意になつてゐる。日本軍の私にまで、漸くもしいオベリカを、彼が必死に戦つてゐることを聞かして、此と、一軍を、行つておとす。然し、一人や二人を、と云ふことも、新開地の殆んど、戦敗したる意見を、提出するの、本日も、否定する。こと、出来ぬから、やはり、私は、此である。

十五、六年の兵士には、面々、このやうな言葉を、聞くことが、あつた。然し、その時、十八年には、このやうな、戦り、を、見せてゐる。では、十九、二十年には、一旅、どうなるのか？

列に、つて、我々の、予想を、果越へて、往く、の、ち、や、い、か、の、と、云、ひ、心、配、が、起、つ、て、来、た。然、し、こ、れ、と、夫、れ、の、戦、敗、と、云、ひ、こ、と、に、あ、る、が、在、軍、駐、屯、軍、の、中、で、も、南、支、那、頭、部、の、日、軍、に、し、て、最、も、熾、烈、な、る、戦、敗、熱、が、あ、る。

16 此、の、戦、敗、は、兵、隊、的、に、つ、の、丁、史、と、し、て、保、持、さ、れ、て、ゐ、る。そ、の、戦、敗、を、し、て、他、國、に、へ、私、的、的、に、戦、敗、の、熱、を、傳、へ、る。

と、云、ふ、の、が、あ、ら、う。地、中、口、軍、の、馬、抄、本、重、兵、衛、が、湯、を、煮、て、あ、る、こ、と、に、あ、る、特、色、が、あ、る。

日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。

日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。

日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。

日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。

日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。

日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。日、東、の、中、口、軍、の、方、に、對、して、進、軍、に、對、し、て、戦、敗、の、熱、が、あ、る。

然し同盟口の生産力が大に数字を上げるに抱くす日本は一向提高しな、提高を平期して紙幣を發行したか之は徒らにインフレーションを増大した。

喰ひつなかに自信を失ひ不安に懸ねられた軍部は「企業者需索」なるものを提唱し、結局軍部は七人の益融巨頭を結合することにより中小商業を破産させた。

軍部は賦税の比増徴を補助した強力をフアシスト独裁権力を獲得した。遂に十月軍部省を設立し金融巨頭を凌ぐと政府の要職の席に置いた。

もう軍部と大政閣は国民大衆の前に堂々と顔もカウチリと腹組をし、地連は何をかくさへ前邊の敵を人だ地連はお前等に対してニルフアシスト権力は行くぞと脅つての假面をかぶり槍を隠り出て来た。企業整備を模言すれば經濟的組織全体主義を論議しねら実は帝國主義的独占であり、國策的には「軍代板と彈丸の不足は五場を潰した金物で行け」と云ふことである。そこで日本は曾つ

たの統制による自由營業の没落の上に今又企業整備の犠牲者を加へ國內は生活資料が、労働者が充滿した。

では労働者の生活はどうか？

確かに收入の美から云えば戦争前には倍々人ともくあつてゐると云ふことも、しかし新米同胞の「敵」した意見である。

而しこれは彼等の生活が果てであると思ふことにはならない。

一面政府は政府は日本の工業地帯だけあつて人畜せのする放棄振りは直ちに目につくものであるが、この生活物資の配給は他の地方に比べてうんと稀薄である。

軍需工業普通労働者にして残業兼夜を求め、平均月収九十四—百円として物價の騰貴は戦争前にはして三倍物によつては賤賤配給不可滑不抗戦前前に比べて之と云ふ悪く生活が落ち下してゐることは明白である。

假令労働大衆が人より少しの間でも余計に生活を楽にせんとしても、それ程の効果は見えない。且程切かうとも賃銀統制令の域を越すことは出来ない。否、寧ろは軍令越してゐるにも抱かずこれは強制野全、産業報国会費、愛国保險、公債買替等政府の種よき支配で直ちに大

衆の懐から收入を回收する政策があり、オライニシに防止に努め加へらる。反面大衆課税の重正と公債買替の中

間に注ぎ廻る高利貸的金融資本家の特權を各局に利益大衆を搾取し貧窮の彼方へ押しやつてゐる。

農村の農村

日本農業者を通じて今一番苦境に喘いでゐるのは農村である。勞力不足（人、馬、牛の徴発）戦争主義からくる農産品の低下肥料不足等その主たる要因である。

農村肥料勞力の不足は致命的である。日本農業者の生活は農村の生活である。

てゐるが此の今日では殆んど戦争の神種となり平に入ら

い、その勢力も不足を救済し、三とは三(九)奇肥料は極く  
糧食の要量がある。

然れども此は納税組合費でなければ軍給と云い政府の金  
輸入策の政策が出来てゐる。政府が解決するかと云はば  
それではよく却つて、農用令と軍用令と大指のやうに都  
會の軍需工場は連日、農村は益々苦しくなるは  
かりである。此の如く政府は増産なくともやがて農村を  
成り立たせてゐる。これは農りに増産を求めする程苦しくあ  
る。何故かと云ふに餓死しぬい程度、食糧は上げられ代り  
に、供出米として公債買替の担保となる取上げれる類は  
増産すばかりであるから。

最近では、節水米(農民が飯米がふくれつてゐる時)供出  
米を取りに來て農民と官吏との間に闘着が起りつゝある  
更に口の中(主入)の政府のやり方は農民の地味を(奪い  
「日に五倍の土地にほこれ」の力を補へる)の増産と云  
と命令だがその結果は却つて、地主の商法で減産つゝい  
な、事実農民は令餓と聞つてゐる。昔がうの讀「百姓は  
喉口をまことして食ふもの皆大失文」は今はどうも七欺  
目になつた。

四 緒 論

以上現在日本の特徴は人民各層の益且通約貧窮化  
と軍事的警察的天皇制的フアンスト独裁力の

完成である。

フアンスト等は愈々人民大衆の救済の基礎の上で  
争を遂行することに決定した。

フアンスト等は現存の「軍用令」その結構としての「戦  
時刑事特別法」の外にまた「農」もの法令を違ひ人民  
を軍事並職に服せしめ或は戦争の動員として使はせよう。  
こゝを云ふと或る人は笑つて早に「日本人は戦争が好き  
なのかい。」「何故平和を願わぬのか?」

「これ以上戦争すれば餓死するではないか?」「或は「日  
本には民主的定額も無いのか?」と質問を發する者ら  
う然り「九一五」問ひ方である。

かりせぬに日本人民として戦争の好きもあつたらう  
か。誰が平和を願わぬ者があつたらうか。誰が餓死を願  
はうか。民主的熱望は今日本の津々浦々を紅に染めて  
ゐる。

事は餘り相対的に見る可きであつてフアンスト独裁の完  
成を以て直ちに民主的定額が無いと云ふのも甲計である。  
其対に民主的熱望が強いればこそフアンスト独裁が強化  
したと思ふべきである。事実近き日本の歴史は民主的要素  
によつて緩やかに進んでゐる。

我々は此の歴史の中に生れ、且つ成長して來た。只今必  
全々成功しなかつた。日本史の落伍者になつたのである。  
現在日本人は究りて平和を渴望してゐる。その為

四の中であつた止ぬと云ふは、ストライキも作

手段暴動威威を以つて説明することが出来る。

日米人民が決然と起ち軍部に挑し事を成し得

ないのはフアミストの暴力が恐ろしいからではなく

「敵は口である」と云ふ所詮は拙劣い腐水

野に於て漸く熱気が氷である。

此れより四内へ流れる民主的主動力はか

る宜敷を一笑に付し問題行しおいが我々は

吾来人民の中にこの挑ぶことを真に受ける旅

路のあることも又率直に認めざるを得ない

だ。我々は大きく云へば同盟国はかゝる日

米の事情を認識した上で何が必要か？

我々の要求は日米同盟の重要性が最も身

辺に迫つてゐる同盟として登場してゐるの

である。

故にフアミスト陣線の眞の精神は我々の

の軍部の宣伝とその人民に對する影響

それは世界平和の爲の大なる障礙であると

下あり。

ゆる努力をいふ所はならぬ。

かゝる努力をいふ所はならぬ。

此の時期はやはり日米の軍事約にも生産的に

も膨脹する時期である。

それでは我々が嘗つて二三度耳にしたところ

の日米の激暴併投降降はどうか？

少くとも現在に於いては困難な問題で

ある。

減削せられたとは云へ日米の陸海軍は誇

る強大な軍隊である。

こうして日米軍隊の過少評價は實に危険

性をもつてゐる。故に激暴併投降降は今す

べからぬ行かぬ。

この日米同盟の勝利の鍵は何か？

我々の要求は日米同盟の勝利の鍵は何か？

我々の要求は日米同盟の勝利の鍵は何か？

我々の要求は日米同盟の勝利の鍵は何か？

我々の要求は日米同盟の勝利の鍵は何か？

我々の要求は日米同盟の勝利の鍵は何か？

北をい  
 かる絶好の機会は今日本に成熟してゐる。  
 日本人民は何時でも平和の貢献者たり得る  
 資格はある。  
 同盟国は更だしく、日本人民の問題を前切  
 りのものとして重荷を同時に如何なる対日  
 攻勢に於いても、此種問題を除外したは  
 絶対的成功しなれことを深く祈願しなけ  
 るべからぬ。

### 慶祝第二次湘北大捷

20  
 日軍第十一軍は十萬の大兵を以て第一次湘  
 鄂作戦を昨年夏敢行し中四軍の猛反  
 攻の前へ取返したが、今度再び湘北決  
 戦地区を侵犯し常德、桃源の線に迫つたが  
 中四軍の深謀戦術に依つて、後方連断され  
 莫大の犠牲を出して空しく退却の余はな  
 きに至つた。  
 現在米十四航空隊の猛爆に依つて船船を破壊  
 され、その後衛部隊は戦場高脱不能に陥り  
 中四軍の包围の中に全滅しつつある。

### 和平先鋒社役員表 (新編成)

社長 莫敬儀

理事 會

編輯部主任	長谷川 敏	部員	秋山 龍一
編輯部主任	未 本	部員	正 木 文
編輯部主任	未 本	部員	林 誠
編輯部主任	未 本	部員	江川 洋
編輯部主任	未 本	部員	秋月 敏郎
編輯部主任	未 本	部員	林 誠
編輯部主任	未 本	部員	高日 武
編輯部主任	未 本	部員	伊藤 昇一
編輯部主任	未 本	部員	岩城 萬吉
編輯部主任	未 本	部員	安部 策馬
編輯部主任	未 本	部員	秋月 敏郎
編輯部主任	未 本	部員	王 南
編輯部主任	未 本	部員	川下 末松
編輯部主任	未 本	部員	林 良次
編輯部主任	未 本	部員	山下 静一
編輯部主任	未 本	部員	中野 寧一
編輯部主任	未 本	部員	北野 有明
編輯部主任	未 本	部員	風見 秋夫
編輯部主任	未 本	部員	井上 哲男
編輯部主任	未 本	部員	南 邦 貴
編輯部主任	未 本	部員	源 正 勝

大軍需省を

末永銅

東條が作った軍需省とは何か、一言にして言へば、それは、全日本の兵器工廠化である。

見よ、東條政府は同盟國の反抗に備へ國運を賭し、國內を大兵器廠にし、もつと兵器を作らねば七國になるぞ、四年の大難関を突破することは出来ぬぞ、と東亞大陸の防備

決戦に躍起になつてゐる。へとく、となる迄作り取られた拳銃、裸にされて投げ出され野良犬の様に路上を彷徨つてゐるのが現在の日本人だ。日本ばかりではない、東亞十億人民を戦争の犠牲に送つた國內と同様に奴隷化し肉弾として奉けさせてゐるのだ。

では吾等動亂の渦中に在つて日本國內は如何なる情態にあるか、又如何なる影響を國民の頭上に及ぼしてゐるか、之を觀察すれば次の如くである。

一、太平洋戦争は攻勢より守勢に移り、英米の反抗に破れ各重要據点を奪取され、戦争遂行費は得難した。  
一、不意打ちの攻襲で領土資源をとるだけ

取つたが巨大な占領區を守る薄山の兵力が足りない。又資源を運ぶ船舶が無いので輸送困難である。総じて云へば少數の兵力で守備しなればならぬ、到底維持出来ぬ戦争を無理にやつてゐると云ふことである。日本帝國主義は死の一番手前を歩んでゐることか一目瞭然である。

同盟國家の対日抗勢の準備は遠東の各処より開始され、愈々日本はその危機に直面したことで、此の危機を切り抜ける為には東條は戦時体制を一層強化せんが為には内閣の組織を改革し新たに三省を設け、その中の軍需省を東條自身が兼任し、文筆三省設立は云はずと知れた戦時下の勝つか七國になるかの決戦に備へたのである。

では日本の生産力は此の決戦に備へ得るか、日本と米國の生産量を比較して見やう。  
米國の飛行機 七月月の生産量約一五〇〇台  
日本の 約一〇〇台

又米國の造船量は年に約二二五〇万噸である。日本はせいぜい多く見積ても一〇〇万噸(上海地区の造船力を含めて)を超過することは出来ない。

此の種の情緒は正統より農村に至るまで大に  
は明瞭である。たゞが軍事手アアシトは國民の  
力減つても不平を言はず生産増進のため起人  
的に働けしと。従来十八時週労働の上によしと  
働け。既にねはならぬ。若し取けたら美米の國民  
地に及ぶをいふと國民を感服してゐるのである。  
全國の労働者は晝夜の差別なく職業、地位、身  
働が加重せられてゐるのだ。その上政府は職業登  
録制を設け労働者の身を束縛し、又労働賃  
銀統制令によつて安積な賃銀で労働者を酷  
使してゐるのである。

日本は一にも生産、二にも生産と云ふ時代だ。従  
つて人民に能率増進と稱し、吾意無しに超人的勞  
働進出が加へられもあつてゐる。

美米より強固した日本居留民は、美米の生産力  
の巨大であること、兵艦の信念が堅強であること、  
等の話も傳出してゐる。又等の話と比較的英  
米の近況に詳しい日本人の口より話すことである。  
國民は到底美米には勝てぬ見込みのないこと  
を知つた。それ故に國民は、最近政府の政事失

22 敗及び日本に勝利のなきことを自認してあり、  
開戦當時とはまるで異つてゐる。殊に國體、不

此の種の情緒は正統より農村に至るまで大に  
は明瞭である。たゞが軍事手アアシトは國民の  
力減つても不平を言はず生産増進のため起人  
的に働けしと。従来十八時週労働の上によしと  
働け。既にねはならぬ。若し取けたら美米の國民  
地に及ぶをいふと國民を感服してゐるのである。  
全國の労働者は晝夜の差別なく職業、地位、身  
働が加重せられてゐるのだ。その上政府は職業登  
録制を設け労働者の身を束縛し、又労働賃  
銀統制令によつて安積な賃銀で労働者を酷  
使してゐるのである。

一方東條はたすう「強硬」を叫び、國力を注  
いで急速に軍需生産増強、殊に軍行機生産に  
重きを置き、之を以てしてゐる。然しその生産力  
が敵対するものに出来ず、国内を大失政に及  
び計つてゐる。それが即ち軍需有設立の真相  
である。

このまゝで行けば当然日本は敗戦だ。では如何  
すれば良いか。

先づ軍部の機軸に支離し、一億同胞を生死の  
岐路から救出することだ。過去七十五年間、日  
本人民の膏血を吸ひ盡した軍部及び其徒党、  
東亞人民を侮し、まに蹂躪した軍部と其  
の一味、搜尋の窮途は時間の問題だ。

日本人民は盡きに強力を人民政府を樹立し、  
この民主制人民政府を直ちに海外に向け和平  
政策を取るべきである。即ち打倒軍部の斗争  
こそ目下の急務である。

完





このストライキは全職工六万五千人の内僅か数百人が参加しただけで、職方面に重大な打撃が与つた。莫と、要求も政治的性質にふれてゐず、その他の諸問題に關しての要求もあつた。主産競争にもよる余程の苦境にたつたために、五連組が折れたものだらう。價値値上げ問題が要求されたのは、これは諸工場の積算制度が採用されてゐり、自分の希望で印け休むその時期に應じて幾らかの収入が少くゐる。それには感惑されてゐた。是と競争の初期の頃とて、それ程の者の生活が送進してゐなかつたこととが原因だらう。

尚ほ五連の労働時間短縮は十一時間、東京三連は「本五だけ」であり、収入は入一年後の本五で約八十円である。

## 三井萬田炭坑(福岡縣)

昭和十五年六月、全職員三万五千を有する万田炭坑にストライキが發動された。坑夫の要求は、労働時間の短縮、社宅の改善、その他諸問題に五長切つてゐた。この詳細は不明である。

事前に坑夫側代表と交渉して資本主に要求を提出したが、全無相手につれず、全坑夫は遂に一ツ

24に立てこもり、ストライキに進入した。ストライキは一月余り続いたが、解決されず、余りにも暴徒化

職員の生活に悪影響を及ぼした。しかし、坑夫がダイナマイトを所持してゐるのを、警察等は手製の火しやうがなく、その反、進軍した。ならば全職が暴動される危険が、あつたので、遂に停水とされた。職全は要求の全部を認め、又労働費用は全職坑主負担、撤収費もせよとの條件で、坑夫側の完全勝利になつた。斯くのストライキに際して、資本側の福利組合、熊本労働組合は數十名の自動車で食糧等を送つて、協力的に應援してゐる。

このストライキは果して相対する組織の下に行はれなかつたか、とが未だに、全坑夫を打つて一丸と心した。ダイナマイトを使用した。即ち数回の行爲をやり、そのうち幾人かをさすに要求全部を認め、又勝利した。これは、果して、いふは、併行もある。そのうち、即ち、下、いふ、更、果して、在、の、門、争、とし、持、に、重、視、に、正、直、な、る、こ、と、だ、ら、う。

## 三小倉陸軍造兵廠

この工廠の職工は約五千人、労働時間は一日二交代制で十一時間、賃金は本五で日給一月三十錢を越して、一月八十錢。

昭和十五年七月、親兵隊の職工の内五百名

野間の短縮、貨物値上。此の事議の起る原因として待記すべきことは、諸王廟の事案廢止の野間は十一野間漸く宿業などはなかつたが事案後十二野間制を採用した。め病人統等、理由不明の行動言が多くなり却つて能率が減退したので王廟漸く豫敷の十一野間に復したといふ事實がある。

結果として要求は全部はつづられ、四日一日一屋の手が延び参加者は全部憲兵隊に解引され書は者は處罰され、参加者も亦解雇されストライキは慘敗した。そしてこのストライキの後全職工は對する監視は特に嚴重になつた。

ストライキ失敗の原因は尙餘、軍兵輔の王坊であること、持た本平洋戦争發動の準備と急んでの軍部にとつては由々しい大事であるがその影響も過れて特に軍部も履しかつたこと、反面組織的方面指導人材方面に力を出してゐたものであつた。だが、この軍部は軍部は此すべしと軍部に於ても強力を發揮するものに拘らず一軍の勇取を望むがその日本精神の低價値と野間野間の反抗して野間したことは事實である。そして又、ストライキ失敗の後、極往に立つた野間に対して全職工は見殺したといふ自責かう強い同情を示した事實もあり、此

# 神戸セネスト

昭和十一年五月朔日より六月に亘つて一ヶ月有餘に渡り船所、川崎造船所(倉上坊とも書く)神戸製鋼所を主として神戸の労働者十万余人(内市民も含む)がストライキを發動し、大規模なストライキを發動した。

ストライキを發動する前各王坊の労働者則は次の要求を提出し交渉しつゝ、交渉を行つてゐた。

- 一、賃金の値上げ……… 最低日給四円五支給し
- 二、労働時間の短縮……… 夜業・夜業の自由、
- 三、配給米の増配……… 一日一人二合セウ支給せよ、
- 四、公傷に對する待遇の改善……… 入院費等受完全恢復迄の家族の生活を保証せよ、
- 五、娯樂・散歩・休養等に自由を与えよ、
- 六、職上に住宅を与えよ、
- 七、兵役に對する不満
- その他

ストライキ爆發の直接原因は、川崎造船所(本庄町)の職工一萬が賃金の上げが、會社の上北に對

して手書・見聞録を呈す。一日一円五銭の賃  
金（該職主は八銭）を支給されたのみぞ、該職  
主の妻は夫の久病を主治不能に陥り會社の態度  
に憤懣し遂に自殺した。このことを知つた全職  
主は非業に激昂し、最後の手段に当たるのである。

鳴りうて千代女はくたつて川崎五坊では奉衛と廣  
五の衝突が發生し、總廠の破産が始り、電氣部は  
は運電も決行し荷客する守衛と感電即死させ、  
又部長二人が殺される等の暴動が起つた。市内  
では電車・バス等の運電も止める措置がとられ、全商  
船も大ストライキに發展したのである。

ストライキの指導者……

東河仙之助（神戸海老区の辯士）……全市のリ  
ー

川崎五坊の指導者……

軍次力（運輸課部長・東上り身）島山健蔵（  
運輸社員・最近東京本社より転勤して来た。官史上  
りとも本會つて昭和聖の幹部だったとも傳えられ  
てゐる人）

その他、指導幹部は三夏造船所に一番多かつた  
といふが詳細不明。

は労働者側の要求は過激で、民間食の増配（シガ  
シ自費）と保護金支拂の小額還元（八割と一  
円六十銭となる）が實現されたので散死した  
。

ストライキ散死の原因：

(1) 各五坊指導者間の連絡不充分。(此の呉指導者  
の一人も認めてゐる。又ストライキ運動は突發事件  
に發展されて早のうられた英米も影響されて混乱した  
やうである。)

(2) 裏切者の続出（総廠方面に不協な英米の  
故に組織維持性が生じ、官憲の買収取締に誘惑  
されたものが多いが、しかし裏切者はリシケにさ  
れ十数名不具者になつた。

(3) 労働者側の武裝闘争の不可能（相手の警備  
海軍に對して労働者も素手同様である。)

(4) 指導者側に對する労働者側の或る程度の不協  
用。(指導者の全労働者に對する大衆性の大降  
。

ストライキ失敗の結果として死の如き犠牲者が少  
。

……



同争は十五年来に亘ると最早そのやうな小  
規模ではなから。組織的に拡大し、しかも戦  
争的規模とと顯示してゐる。十六年早は  
二戦動された藩戸ゼネストに至つては、  
その代表的なものであり、戦争的開争の  
昂揚は謂ふまでもなく、特に組織的方面に  
於ける拡大、即ち従来比較的資本家側が  
り好待遇を受け、反動的武力にさ大立つ  
てゐた職長級迄を含み、又都市無業階級  
と協同しつゝある点こそ重要であらう。

これは即ち戦争の消耗と凡ゆる軍事フアシ  
ストの彈正が國民全体の身上に堪え難き迄  
にのしか、つてあり、従つて戦争は開争  
は現在國民の凡ての階層を含んでの全國民的  
運動に突展してゐることとを實証するに化を  
らぬ。

軍事フアシストの彈正のために現在労働組  
合は全部解散され、産業範圍全一の組織下  
に凡ての労働者階級は縛られ、その真正な  
る組織は表面的には存在してゐないかの如  
く見られるが決してそのやうなことはない。

大いなる國民の先頭に立つて、其の發展と  
果してゐる。

今や日本軍事フアシストは中國取柄に又大平  
洋戦争中に於て巨大なる同盟軍の反攻に遭  
ひ惨敗しつゝ、徳軍の猛烈さまじのぶべくもない程に  
弱体化して来た。此方戦争と雖も軍事生産方面  
に於ても亦尼大なる米國の生産の前に到底追いつ  
くことの出来なないことを自認しており死に者狂ひ  
にやつて生産増強と國民に強補し、又軍需省と設  
けつ企業整備案とを發動して凡ゆる平和産業  
と取り潰し兵器製造に投げ込み、決戦準備とを  
急いでゐる。

だが、日本人民の侵略戦争反対、軍部打倒の  
同争は、労働者階級の勇敢なる同争に先導さ  
れ全國民的規模に發展強大化されつゝあり、か  
る同争こそは近き將來に軍事フアシストの  
足下を覆へず決定的力量であることは疑ふ  
べきでもない事實となつており、それは又同盟  
國の遠東フアシスト撲滅戦の一斉發動の時  
期に、これと協同して共同敵を徹底的に粉碎  
消滅し、平和と自由の民主日本を固く獲る  
べきであらう。

# 日本フアキシストの農村政策と農民の動向

田中 達

半封建的搾取と資本主義的三重搾取の極端の中より立ち上らんとした農民は遂にフアキシストの政策攻撃に蹂躪され、奴隷化されてしまった。尤も状況下にある農民の動向を見よう。

## 一 農業生産の高品化による中小農の零落

昭和五年の農業恐慌によつて賣らされた農産物の急激な低落により、農業経営者は破産會はず負債は年々増加し、極度に農村を疲弊させた。當時政府は農村救済策として低利資金を貸付けて商業的農業経営を奨励した。

富毛の底で困り抜いてゐた農民達は、金に乏しと言ふ仕事には飛びついた。そしてラミー、葉用人、麥、除虫菊、絲瓜等の工業作物、果樹、花卉の如き園藝作物の栽培及び養蠶、養鶏、養牛等の家畜の飼育進んで、これら生産物の加工等の商業的農業経営に移つた。

かくして農村と都會の關係は益々密接となるにつけ、農産物は益々大都市の資本家に殆んど特約され、数量、價格供給時期等は皆資本家

の欲するまゝに左右されるに至つた。

農民達は彼等の要求に應ずるために農産物の貯蔵式は保蔵栽培、物産栽培等の高級栽培が必要となつて、農業生産農業経営上に新しい技術、高級な設備、高價な肥料等が必要となり、資本力ある者と無い者の間に於て又品價に於いて大きな開きが生じて来た。初め政府の低利資金は需が足りて、かゝる経営を初めた農民達は高農の高農を経営には競争出来ず、大多數が失敗したのである。

例えば昭和四年以来全國的に盛んとなつた養蠶業者は、その如きは、愛知、静岡の富農の大規模な、多甲鶴、集中には敵し難く、幾十萬の養蠶業者が失敗した如く、政府の奨励した商業的農業経営も、全國五百六十二萬の農家中僅かに二、三萬の高農が成功しをのみで、その高農の成功の裏には幾十萬の中農及び貧農が零落したのである。その為農村の負債は益々増加し、農民の生活は一層深刻となつた。破産して農業を

日本農家の変動表

(昭和十六年 要四年鑑より)

	昭和九年末	昭和十年末	昭和十一年末	昭和十三年末
自作	一七四〇、二一九	一七三二、〇八六	一七三二、三三九	一七三三、九九七
小作	一五〇、八五一九	一五一八、一八一	一五〇、九七〇	一四六二、二七六
自小作	二、三六八、九四八	二、三六〇、三四〇	二、三三八、六二五	二、三三〇、八八七
合計	五六一、七四八六	五六一、〇六〇七	五五九、七四六五	五五六、九七七

昭和九年末の全農家戸数は五百六十二万七千四百八十六戸であり、十年末には約七千戸を減じ、十一年末には更に一万三千余戸の離農者を出してゐる。これを階級別に見れば、九年より十一年末に至る二年間に自作農は九千余戸、自小作農は二万戸を減じ、小作農が九十戸増加してゐる。これは顯に中農及び貧農の轉落を物語り農村疲弊の深刻さを證明するものである。

**二、危機脱出の爲のフアシストの農村政策**

中農層の零落と共に貧農の紛争件数は激増と分けても土地に関して一平封建的残滓中で貧民本主義化せんとした日本農村の矛盾は深刻となつた。

廣田内閣時代に大陸政策強化と共に國防充實と國民生活安定が叫ばれ、農村救済政策が経済政策の重寶とされるに至つた。

當時島田農相は、小作争議とは小作と地主の喧嘩だうう、喧嘩の中裁するだけでは駄目だ。喧嘩の起る原因を取り除かなければならぬ。と小作立法の必要を放送したことがある。

この種に土地問題をめぐつて小作農民の自発的要求運動が盛んであつた。政府は事態の推移を恐れ、自作農創定並に維持をもつて土地問題を解決せんとした。しかし窮乏のどん底に困り抜いてゐた貧農連には貸付けられた低利資金は農業資本の拡張とはならず、只借金の利拂と負債権者の懐へと轉り込み、彼等の利潤を満足させたに過ぎなかつた。

又廣田内閣以来の王政政策と言はれた。米穀自給管理法案、産物處理法案、肥料統制法案等も具體化されるに至つた。

政党政治脱落后に於て何故このやうに農村

る事よまでもむく危機に直面した日本資本主義  
を不況大化によつて改善するには先づ農村の  
産業振興が重要とされ、産業組合を中心として  
國家資本を運用し農村にその経済基礎を固  
めようとしたのである。

當時資本家側からは物産及び産運動が起つた。  
台頭せるフアンズム等は農民の苦しいのは産産政党  
のためであると、時には資本家打倒のスローガン  
で掲げて農民をあふり立てた。窮乏のどん底に  
あえいでゐた農民はフアンズムこそ我々の農民を救  
つてくれるのかと思ひ、農村青年の間にはフアン  
トに共鳴した者は多かつた。

かくして農村に政治的経済的基礎をかため  
たフアンストは遂に對外侵畧戦争を發動し國  
民の眼を戦争に轉じさせてしまつた。

そのための封建的搾取と資本主義的搾取の中よ  
り目録めんとした農民の階級意識を蘇り  
去つてしまつたのである。

### 三、開戦後に於ける農村の疲弊

七七時愛勃発するや農村からは一家を背負  
つて立つて来た青年達は次から次へと戦地へ送

送られた。農村は空しくなり、その為生産量は  
要に及比例して激減せざるを得なかつた。

そのため農業経営は益々採算合はず、農民は益  
々窮乏の二途を辿つた。當時軍需工場では深山の  
労働者を募集したので生活に苦しんでゐた多くの  
貧農達は都市工場へ或は鉱山へと移動した。  
試みた前に掲げた農家戸数の変動表を見よう。  
昭和十一年末より十三年末に至る三ヶ年間は離農者  
は七万七千九百六十五戸で既前二ヶ年間に比し約四  
倍の激増である。中でも小作農民は五万五千戸の  
激減を表示してゐる。

かかる労働不足を補ふために政府は墾動機  
發動機の使用を奨励した。そのため平坦地帯  
ではこれら機械の使用が増加した。例へば福岡縣山  
縣郡東求村の如きは戸数三五千の部落中墾動機二  
十四台、小型耕作機六十台で使用するに至つた。

しかしこれは昭和十五年末に至り石油不足のため  
折角買入れた機械も使用することは出来な  
かつた。又肥料対策としては自給肥料増産が全國的  
に叫ばれた。しかしこれも労働力が充分有つて初め  
て可能であるのに、労働不足を解決せしめては不  
可能であつた。



故に政府の村振興策を農民が固めてゐるが如

のため昭和十五年の収穫は不作に違つた。食糧増進  
 は五月の飯沼にまで回つた。組合倉庫の穀物手  
 件まで要した。この様な労働力並に肥料の不足は  
 生産量を急激に減らし、加ふるに昭和十四年の朝鮮  
 の早害は一入と政府下日本の食糧問題を激激し政  
 府はこの緊急として食糧の集荷配給を極度に統  
 制し、一寸餘火なる増産計画を立て、可憐い女子供  
 にもまで労働を強要した。各地で女の馬車が賃助  
 させである。しかし疲弊し切つた農村には着せ馬に  
 重荷であつた。昭和十五年の政府の増産目標は米  
 穀七千一百万石であつたが實際は僅に六千四百七  
 万石に過ぎなかつた。昭和十六年度の増産目標は  
 七千一百万石であつたが、この年は全国的に低温  
 不稼産を減収した。愛知縣海辺郡甚目寺町出身  
 の大山君は次の様に言つて居る。昭和十六年春、政府  
 では土用の今迄と此種増産を以て、早稲一更歩は僅  
 位収穫を来た水田や四五畝しか種れなかつた。これは  
 天候のせいもあるが肥料が思はずに使つたためであ  
 る。この様な矛盾を有する増産計画も實際の上を  
 らぬは當然である。

屋市民に自由を認め、生活とし、増産を促す。昭和  
 十六年に至り政府は穀類増産のため野菜の作付に  
 制限を施した。そして大春栽培を奨励した。  
 そのため僅かな土地を耕作して生活してゐた當地  
 の農民の収入は激減し、生活困難に陥つ入り、軍需  
 工場へと出稼ぎする者が増加した。  
 かくるフアズムウ農民政策は苦しんで居る者  
 は強り農民ばかりではない。最近都市に出現した  
 青物屋の前には野菜を求めんとして列をなす  
 長蛇の陣もよく見られた原因である。  
 窮乏のどん底より農民を救つてくゝる者はフ  
 アズムである。信じてフアズムに共鳴した農民  
 は今やフアズムウの絶対権力機構に縛り付けら  
 れ、作付の自由も販賣の自由も奪われ、自分で作  
 った米を食ふことも大制限されて黙々と戦争政策  
 の奴隷とされてしまつた。  
 フアズムによつては農民は永久に解放されな  
 せん。フアズムこそ農民を永久に奴隷化せんとする  
 もつたのである。

一 理研の誕生

先づ私は先づ理研なるもの筈策き、上野三財團法人理化学研究所の発端について述べる必要があると思ふ。

大正二年故高呼謙吉博士の国民科学研究所設立提唱に端を覚した。彼は先づ日本の化学の発展の具材を計さんとし、貴族院院に請願書を提出した。該会解散で目的を達し得られなかつた。

時政制に於て大政起るや、此等之を案の必然の要亦に痛感した政府は、近代文明諸國に違ひ行かうと志し、大正五年來化學振興策案の準備に入

り四年に對り現在の理化学研究所の設立準備と定めた。是して大正五式に設立許可が公布された。先に政府は四庫補助基金を定率し同所設立に對し一年迄は統計百五十万円の補助金を出

し、毎年二十万円の經常費を支出することに決意された。其の他財界政府の有志より、六年三月迄に臨時二百五十万円の申込寄附金があり、今の本館に記述せしむる前五一の三妻岩崎邸跡に建築された以上、その概略である。

現在では伏見宮博泰王を総裁に、浦長三學博士大内正敏次下三十四の研究室を構成、主任以下若き博士學士達、理學、工學、物理、農林等凡中も研究に没頭してゐる。俗に云ふ理化学研究所は昔界大天研究所のひと云つてゐるの正確かであると思ふ。此の偉大な研究所も、根本に今や理研研究金に産業資本家となり上つた。何故この様に成つたか、次に簡章に記して見やうと思ふ。

二 理研の概略

理研が現在の様を財團に成り上つたに、他他の何かを脱性にして來つた過去が、何があるを、さうか、一、これはここに重きを置いて搜尋する方針計畫について述べることにする。先にも記した如く、理研は二、三、日本唯一の理化学研究所として、化學振興に備ふる為の一級研究所であつた。それが三、三十五年來に著々一、個の財團として成つたのである。故には當時の財團より、若年の積蓄を得て、三、三の株式会社の設立に意を、當時日本の産業は、中一次歐洲大戦の影響を受け、何と然その発展進歩は著しかった。各産業、

資本家は秋先より自由競争に入つた。理研もその潮流の一に流れて、次第に擴大實行した。昭和三年頃より増進。その威を絶たし、滿洲事変前後に於いて、完全生産事業本家の傾向を著し、その後、軍部を相強し、全時に地方中小資本家を合併して、軍部を相強し、フルトあつて農村地区に進出した。農村軌道を救ふのたし、口裏を完全に軍部を相強し、平和産業より軍事工業に転化した。その著しい進展を左に記せば、一九三六年末に於ける社数は十五、公費は三六五百万、得資は一千万四百万であつた。一九四〇年に到りては社数六十一に達し、公費三億、得資一億七千万、組織強さ、今やその資本二億、社数十百万に達してゐる。

### 三、理研の現況

前述の様にして理研は發展して来た。現在六十一も有する工場は悉く軍事工業品、品の製作に従事してゐる。その現況の一端を二三書に見たいと思ふ。中、彼等として一番大田な青少年男女労働者に対して見解を述べるならば、此の大多數の青少年労働者に対して彼等は如何なる教育をしてゐるのか。彼等は此の戦争遂行のための組織的な天皇の発布した青少年学校勤務を基本として、思想的にも彼等は、同様のあり、東亞共榮圏の確立、美名を又つて、その本質を露わしてゐる。

利は二に現存、青年労働者、述べて見やう。

高崎には理研製糖、西麻番、氷力番、亞細亞製糖、合成樹脂等五工場があり、青少年約千八百名を教育してゐる。男女共本科一年より四年迄に分れ、其の他、研究科なるものを設け、優異者に必要は教育をしてゐる。主として修身、公民、数学、地、四、話、書、算等を教導し、又女子には裁縫、家事、手回家、能力訓練、女性教育に力をおく。校長は子爵海軍少將で、末次大將と野宮の佐藤正四郎、顧問には今又優異者に従軍し、各地の護国神社の宮司たる海軍少將松山義則を立て、他は軍事教練の教育、普通学科の教師等十数人で、封建的教育をふるまはせして教育してゐる。

こゝでは週二三度、午後一時より五時迄の労働時間を利用して、主は軍事教練に没頭してゐる。こゝから多くの青少年労働者は、農村軌道から、遂に工場に持ち出された人々である。その軍事教育は強制的なスパルタクスのものである。会社でよくしはられ、学校ではかくの如き、日曜等も何謂引つかり、出さず、一茶の暇もない。その疲れた身体は、時時増産で

9 政府の貸銀統制令による貸銀で以前  
の利率個人受取りは高く、年終により差は有  
るが大體七十銭から一月三十銭位である。

それむじうの公債、国債の強制割当や強制  
貯金で自分の手元に入るのは一体幾何だ。そ  
れも家庭の生活苦に迷らねばならぬ青少年  
男女がその大半である。又一方年長労働者  
を見るにどうか、彼等は農村飢饉のため、  
生活も維持するに苦しみ本米や米端に入った者や  
臨時統制のため職場を失った中小業者や、  
内地より帰還した兵士が大半である。

彼等は例の技術もなく、少然経済的困難は  
来され、政府の独裁的強制下にはその不満は逆  
に青少年を動かして、資本やストライキや軍用機  
こつ、あるのが、現状の正体であると云ひ得る。

この様を厭気気分が軍部と徒党に對する友  
敵の事象を見るとき、彼等のうまい口実は  
今や露露されつ、ある。

そして彼等はどうか、日夜宴會をこの  
色々の口實を表面に飾り、豪遊してある。  
し、企業家の利潤を、投資者たる財閥と差別  
けしてある。

の文化向上の爲の科学研究所でなく、完全  
に産業資本家であることが判る。そして  
独占的の金融融資本國の支配下に同民を  
搾取する機關と化したことは明瞭である。

人類や民族の爲の幸福を計るべき、科学研  
究所が殺人道具を製作するのには驚かして  
るが、それとなく、それによって商賣をして、利  
潤追求の勞利会社と化したことは日本國民  
の不幸福の上にもなるとおぼはねばならぬ。

繰って現在の回深状況を見れば、今や日本  
フアツムの辺り道は死の谷と化した。

此のときに多つて我々は日本民族として徳義  
を徹底的に標本より打倒し、我々人民の幸福  
獲得、人民共同管理による資本の運用獲  
得、を目標として立ち上るべきであることと  
功業に  
痛感し、これに向つて邁進し、実行せねば  
ならぬ義務ありと信する。これこそ日本人民の  
幸福の路であるとして何であらう。

我々は此のために斗争する。そして日本人民に  
手入らねば任務だと確信する。

完

# 全日本 農民大立に格す

吾妻新報

飯米供出の最近の情態は益々悪化し  
た。其の一例を挙げれば……

新潟県刈羽郡北條村の者が勤労動員で  
二月間東京に出たが其の家へ果から「そ  
の二月間の飯米を供出せよ」と命令が来た  
と云ふ此の一割から我々は次の事を明瞭に察  
知出来る。

即ち需用高一幾多否に對する水旱等懸収  
度高六千二百万石は東京米政權に重たなる  
食糧危機を身へ加ふるに船舶不足と航海兩  
難とは占領地の飯米米の輸送を絶望たし、  
今や全農民の飯米採育權を徹底的に動員と  
し得……間に合はるか承つてゐると云ふ事實であ  
る。

この種の農民悲劇は全日對する處に現出さぬ。こ  
れに對する農民の反抗も次第に増如し一時大東  
亞戦開始によつて下火に承つてゐた小作争改も各  
地に噴出してゐると最近の日本新聞は至直に  
告白してゐると云ふ。

36. 東條政権は十八年二月臨時国会に於いて戦時特  
別徴収法を提出し……

抗を遂に敢りしきつてゐるがそれこそ彼らの弱兵  
を養育する何よりの具體的事實である。

東京は再三の臨時国会に於て「テゲオの演説  
中に「一切を戦争に集中しろ。でなければ亡  
び」と声を高擧して言つてゐるがこの爲に一休と云  
ふことが代はれたかと云ふと先づ企業整備によつて  
一切の農業生産機械工場は軍需工業の採掘にさ  
れ中々農具製造場は材料の配給を停止され  
はかりで夫々一掃して三井三友に買ひ上げられ  
そのまゝ軍需品製造の下請乃至手先になつて  
しまつた。

だから軍需の相河に増産<>と農民を打ち  
打つても増産どころか逆に生産は低下してゐ  
るのである。

日本の農産物生産は創立初期多少用費はやつた  
ことはやつたが機械の不足と労力不足のため既  
にその事業は破綻し、既に地方農民に勤勞動  
員を強行し究極の約と承つてゐる仕事である。  
特に東北地方農民の唯一の副業としてその家計  
を助けてゐた取根類栽培は自支事度受養

……

37 之矣。夫亦たはかりか。村建工場の人衆として坊きや  
かみ無きしの人であるは末である。

本長野山梨の山名地方は養蚕業の絶望化  
の爲め大規模に桑畑をつぶし麻の専作を  
競請してゐるが、これも軍指支配で輸入は制  
限され、それのみが代金で三倍以上五割は回債  
の時金通借で支拂はれてゐる有様である。

この種の副業は全回を通じて戦争の爲  
に全滅し、全農民は既に二回の道具に  
全農村は天農地獄と化してしまつた。

白根農村は故の失墾の代りに飯米供出と  
野菜撤去が丸小箱に小作料と税金は青  
のす(ま)でしほり(ゆき)全農民は金身銀ま  
みれとなりまらめき(み)が最後の半年の敵へと  
進み立てられぬ。

軍部の光手は中小地主から富農にまでのは  
さ成波善の末梢野子及び子弟は各放逐  
く軍司令部で大座の軍需工場や樺太台湾等  
の軍需工場へ送られ監禁同様の強制労働  
に從事せざるを得ぬ。

日本軍部の最期のあがきは真天に達し

ごま化しと各職を許さぬ。我々が討たんと  
まりつゝある。

戦費ある進歩的友之会員諸君！  
この事実を我々は折じて見逃すことば出  
来ぬ。戦争を最に痛切に体験してゐる  
我々は今こそ奮起して戦争絶滅の爲に斗は  
ねばならぬ。

戦争軍部を打倒せよ！  
人民政府をのこせ！



辛苦を重ねた

収穫も

供出率

強制輸入で

飯米無え

に泣く日本人民

実

語

詞

の

後



市川賢則

巻

東洋(東野)三十九部隊(中三)隊に入  
る。私は十日間の準備を殆んど、早

く三月三日、當部隊は直ちに中三隊に同く、早

く三月三日、當部隊は直ちに中三隊に同く、早

向けて出発した。

私は舟は波洲の舟三三(三)隊、山崎部隊(改車隊)

に編入されることになり、翌日(三月三日)朝尾浦から

中三隊に同けて出発した。

時將に七時五分、私は舟は貨物船、おん(おん)に乘り

出た。船は、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

でもされるやうな想いだつた。

舟の人影はだん／＼かきかたつて行く。舟の中

は冷たい。汗臭い。矢張り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

兄妹の面影が消えて去らぬ。

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り、おん(おん)に乘り

如阿比の夏川式林は想はれて来る。

勢の足事有仙の少しも家かす人定か。而しこれ  
も皆ん天の業の表は神に依つてそのまをたは  
のた。勿論個人約を取持の歌美も多少はあつた  
けれど。諸法天那獲羅にそれた様だか。

それから一日二日とつらつら聞いて毛海ばかり死。成  
及の成る者は船にそれるいせいか。叱咤する者  
熱楚する者。或いは精神的者前ある者で  
およびて死た。

新人不情態を見る時。私は何日か西澤吹  
馬で見た様お悲愴な場面が更想される。こ  
んふ騒ぎの中に千手百子日千角六時。東の  
空が赤くぬもたぬ林が明け方吳城に着いた

二、三、三、三

初めて見る異口は那。私は一度はあふれに  
天をたはつた。何んぞ??

相模原し海軍を羨しい天陸の夢を  
おやかく日軍軍が深き天のたあ

う。別天文家。歴史をた。五六時上  
紅毛をのり家は波陣。虎陣の野戦の時

の旗に映つてゐる。そめて地句いたこの家

是は未だ経験しな。戦争が如何に悲惨であ  
る。想はれた。

上座した私し等は程近い上洛の隅に在る兵  
船に宿舎を取るべく行軍した。  
亞は出人よりと愛り今にも雨を呼びやうで  
ある。

正時頃兵船に着いた私し達は中食を済ま  
せて後段に對を責やした。四圍の訪。故郷  
の訪。成事の話。而し私は老つき吳淞上  
陸した時見たあの倒れか。つ天家。夫那の走  
人等奇快が頭を下けて。私し達を迎えてお天姿

お如何にも悲哀やうに私しの腸裏から滴  
えて去らぬ。三層建の兵船宿舎は。十五百  
人以上の兵隊を收容し。兵士空に俸えて  
ぬた。

私はその夜。三菜代の銃前歩哨に立派せら  
た。歩哨に立つた自分は今再下ら。外に東  
天探ふ。そしてまひ知れぬ寂寥をうき身に  
感するのたつた。

おやかく日軍軍が深き天のたあ  
う。別天文家。歴史をた。五六時上  
紅毛をのり家は波陣。虎陣の野戦の時  
の旗に映つてゐる。そめて地句いたこの家



大向がく軍機を漏れた。

松平が急いで出発準備をせよと上洛取に命づ

た。

序車駕には已に九州行き行列車が松達を待た  
せて居た。三平本願因山崎部成に漸入せられた  
松達二十六打もそれく、車上の人もあつた。かく  
して松達を乗せたり車は一時停滞した。……  
真意は見る山崎を……街々は急を松達の  
隊には切望したつた。九州延は明は遠くは  
有のと云はれぬそれで、時計を見ろと九時を  
指しむる。

松平は着陣隊幕に集りし者中隊幕に宿舎  
に入るべし矢書に急いた。

### 三 矢書

真時不吉、天下山崎火村の洲を……  
隊に入るべく備成は行はれず……  
右才五張七力、才四張七力才五張七力と人員割  
り行陣此、松平才一隊に備成を……

……松の入り……隊長上杉軍中……

付下五箇藩本軍曹……山日住長……  
九石五平兵二九、二平兵十九、松平を……

た。

明け成は(二十六百一年)……  
松はその度隊幕に入ると下九州の山崎火村の  
訓示を思ひ……お前等は……  
の中堅に……又……  
は二十六百一年の……  
命を……  
松は心の……  
言して松は又自分の……  
は……

昨年の……  
かつ天が……  
餅を……  
為に……  
……  
……  
……  
……

……  
……  
……  
……  
……  
……  
……

……  
……  
……  
……

日本の軍機……



私に渡すのだった。そして改つた後で私のそばに寄  
つて来て、「オイ前川、本番はお前の食事を考へな  
いのだが、地方者を改つてお前だけ改つらうか」と云ふ  
も彼の立場が困るから否ア後で請しをするからと  
云つて、「オイ今日はこれで帰れ」とつ可成した。

私に「前川飯、ます」と云つて飯らうとした事  
と宮天部隊から出てゐる百軍兵と呼びよめた。  
「お前は山崎部隊の兵隊だろー、現役だ  
らな、ふんた貴様、現役ならしく中つて見ろ  
俺は補充兵で而も他部隊の者に気を入らさ  
て口惜しいと思はないか」と私は口惜しかつた、事  
実汚くもないものを汚いと思はれて、腹がさす二度

三度彼の胸めに殴られた事は私としては今にも  
忘れたいや相手を殴つてせうろと思ふ氣持で一  
茶だった。然し演習要列は時間を待つてはな  
かかつた。私はそれと氣に於いて橋手に手を止すこ  
とを止めた。今日は飯丸と云はれ、私には口惜し  
さを耐へて矢會に飯つた。矢會には政友らの要  
が一人も見えない、もう已に整列の対向は違つて  
なる。

私はは後腹して軍装し宮庭に意欲出した。時  
同は五分以上もおくれてゐた。私は隊伍の中に入

は今まで何をしても出来なかつた。私は  
はい市川は今日會場準備の爲に遅れまじと云  
つた。すると又軍衣は準備し、手前は養林一人を  
やない者、政友、内務省は百軍兵だ、それにお前  
だけはおくれば済むが、空を食ふな一歩前へ出  
ろ」と云ふので私は一歩前へ出たと同時に目か  
ら火が出る様だ改つた。私の軍靴はジーンと本  
音がふさふさとして、意識が遠くあつたと覺つた

う腹の前になる山崎軍會の首長の顔が浮んで来て  
先刻改事で改つた兵士を隊長が百軍兵に等車で改  
會を入らせた本やう演習の演習會に整列され  
た。私は腹に腹した。私は演習會で演習するが山下  
軍會のあつて空を走らな。軍會は五歩後退した。すると三度の橋本

隊長と山下の小山隊長、市川何ともし、と後をう私は押さうた。  
私は腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つ  
た。然し私は、オイ市川、演習列をいれ、と云ふ私を離さなかつた。  
私は腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つた。  
私は腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つた。

演習列に遅れた事情を話せば問題は解決する。事はいか  
んが、腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つた。  
私は腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つた。

演習列に遅れた事情を話せば問題は解決する。事はいか  
んが、腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つた。  
私は腹に腹した。私は腹と胸に山下軍會の腹を割つて行つた。

隨

想

雨露口にて

爽やかな風

扇に水漬く

雨はほの白く

衣洗ひ舞の手に

好翁は睡を嘗長く

晝寝を語ら小

山家の庭

窓念と歎とる背に

汗キラリ

筒骨太き若者

蔭す土土

貴州の峯

あかやかの

大いなる時代の霧 果てしなく

滅火想少矢

手を振り

トラフタの夢塵

油豆子片手に 微笑を

妙児 ちや尻る犬

湖見草



石段長き丘の峰合に

集を子々輝く輝

平の顔に純真の笑

若き情熱 溢れ出る

舞の古の葉に 胸がくちませ

健やかなに 伸びあんな革命児

この道この丘 志の地

吾界の理ぞ 歡喜の地

民族の血 理想の香界

苦幹ありとて 境迄く

自由と平和 吾界をめは

策く力ぞ 絶ゆる亦し



(一九〇三・十一月二十日)

数村民の目撃物語

十二日... 是れ本町北庄来る!!

又其後更に飯つて林人であること...

飯盛下で、此れ北庄のついでと云え...

飯盛を導く者がある。隣町安相子

の多で廊下で噴つての大比呂が叫んで、我

れ北庄だ!! その声に驚くも、村邊は北庄

邊見者、来るはオイツノ邊見者か? 見る

所に驚かす... 吾等邊見者か? 大比呂

やがて彼員の北庄で明瞭に承知、北庄の

北庄の北庄と云ふと共に吾等邊見者か? 見る

に來たハ、吾等邊見者か?

大比呂、北庄の室内に迷入り、

吾等邊見者か? 見る

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

大比呂の聲を聞き、暗闇に北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと



北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

北庄の北庄と云ふと、北庄の北庄と云ふと

戦火を越えて 山名盛夫

風雲の遊じき寒夜

我等清き山川の畔に戦ひぬれ

道の濠野に九折れ 矢盡きて倒る

敵陣巖石に中りて火花を散らし

静寂なる大地 彼方に鳥の啼く声かすか

突如 戦火の中より高き叫び声

我はと傷口手をあて耳を聳つ

たしずかに同胞の声――

傷つを療れし我身一踏踏み回りに走る

あゝ 同胞の陰を声 悲痛あり

如何の為 涙のに末丘りしか

父母兄弟妻子の面影 眼に浮び

あゝあゝの志！ 我地には眩き叫ぶ

戦場の風をきき 今ぞ敵軍

迫り来る声は 方々莫実あり

我今まで 父母兄弟妻子の為 戦ひ来りしに

皆悉く 敵陣の下に奪れたり

屈辱と 飢餓と 憤怒の 声雨の 雨の中

あゝ今ぞ知る 彼の 叫びの 莫実あるを

吾等 の 勤を 如何にせん

我々の 叫びが 血の 声を――

皇正の 敵は 我等の 背後に あり

あゝ 我々の 敵は 敵 敵といふが へすべし

今こそ 人民の 敵と せん 門はん

侵暴 戦争 反対 日本 軍部 打倒！

東天の 空 療れし 身に ほとく とも 明け

我が 体 戦事 と 抱き 合ひ

寂然と 立ち 天地に 誓ひ 叫ぶ

# 友の記録



洋川

嵐の様な拍手の浪ともたがはは一斉に歓聲をあげた。内田君は感激に込め上げて涙を流して、笑で顔をほころばう同じく萬才を叫んだ。誰も彼も皆、且て公界書に上置した旗を輝して手を叩いてゐる。二階を見下ろすと友の會の同志達が揃干たずうりと体を束り出して手を振って叫んでゐる。

この情景は和平村創立以来未だなく始めてだ。だつて、たつた今、僕等に大きな激励と深い印象を與えた。虎地の同志も涙と手とをこめて、そして以て君の三人の同志と連れ門を出て行つたんだから。

内田君は両ひだみエする感激を無理に抑え虎地さん最後の叫びで宿つた言葉を心の中を繰返した。志成りせんば人民の爲に死なう、志成りせんば一東京で奮闘しよう！ 何と心強い言葉だろう。

本島に僕等は重い責任があるんだ。……内田君は涙の流がを抱いて二階へ上つて行つた。僕の革命の情熱は燃え上つたよ。これより大いなる革命の情熱が燃え上つてゐる。……

あつた。こつちで皆話してゐる。高ぶつた聲だ。無理もない。僕等は皆、本當に真剣であるし、内田君自身だつて、胸の理勢を感してゐるんだ。唯、今、非常時に重大な決断が要する。民主聯合戦線の勝利は最早決定的なものだ。……

東洋が連年の眼に注がれてゐる。當然、斯うなると日本の運命は國際的視野から眺めることは出来ぬ。内田君は心の衝動を胸に座つてゐる。巨君に話しかけた。……

虎地さんが言つた通り、在野の眼は命や連帯に集中されて来た。……日本は今、聯合民主國の建設に邁進する時だ。……

……結果となる。……



日本は強國たるを願ふ。僭号は之違ひ、帝を完全に更けて、  
三國條約を古條の爲に、全國的に僭号の人民聯合  
を組織し、日本民主革命は僭号日本人人民の力でやら  
ざるやいけなう。

昔は内田君の周囲に集つて、お互の固い意志と決  
心を表示し合つた。内田君も半年前迄は我利我々  
首者で、僭号の仲間でも理論的を指導者である  
HさんやKさんとともに論争したが、今はない。

矢張り日本で積り込まれた侵略主義の理論も、彼  
等になつてから覺えた正しい理論には勝つことが出来  
ない。義勇の前に敗北した内田君も、然し非常な堪し  
かつたであらう。

これ迄、敵視したHさん達の所に  
行つて、憤りから強き言葉を、更なる第一歩に努力  
します。憤りや責罵は正しい理論には負けません。

それから附き纏つてゐる悪魔には勝つたわけですが、ハツツハ、  
と控へたもうだ。皆の進歩も早かつたが内田君のせいで

後の進歩は実に素晴らしい。内田君の努力は断  
つて、彼の革命的情熱と、そして日本更紀階級に對  
する人間的憤怒と共に他の同志達を驚かした位で  
ある。

虐牲と欺瞞性の子を身と以て得た休戦と、本末の平  
和と愛好する熱情とで克くしてゐる。正統の人は人  
間的愛知と平等に、江蘇をさるを得ないであらう。

この二は内田君の身でなく皆が中國の政治が正義であ  
り、日本でシエト組織、日本民主革命進行の爲に、  
中國組織に賛成し、統一戦線に參加努力することは、  
人類の義として正統なる任務であり、又中國内  
戦勝利と日本民主革命とが不可分離を相互間  
別性を有してゐることも固く信じ、その爲に更  
なる革命を打込んで、毎日有義義に送り、所  
當處を方針に一致努力して、和平的を達成村民と  
進歩する。強硬なやつたつてで明らかである。

もうあるが、半月毎つ、新春の熱い光線に、自然の有  
無味を感じながら、内田君は高壁に降り掛つて日  
光浴をした。昔も上夜を脱いで日光浴を樂とてゐる。  
平和な傳傳風景だ。内田君はつつと想ひを  
いびく、と過うして故國の空に向けた。

嗚呼、何と惨憺たる世界ならん。克己したる  
文字は魂を穿たぬ露骨に一切の國家權力  
と富と強を、全國民の上に披瀝と仇敵と死を

40 権に是座してゐる。主は故國日本の者だ。汝漢の

内田君は心中激昂を感じて、愈々大なる使命に  
奮闘を覚えた。傳唐に生さる偉事の存在の何  
と情大なることよ！

内田君は自分の立つてゐる大地が新らしい息吹  
きに胸を打ち振はしてゐるのを感じて、大なる精神を  
して新呼吸とした。

オーイ、内田君！、野球をやむいか？、  
新編の運動部長は君が手製のバットを振り廻し  
てやった。内田君だぞ、興奮を止す。偉事は先ア  
ほ全なる身体を保持するが要があるからうきよよく  
野球に熱しな。

カーション王打も打ち疲れた内田君は意気あ  
とペーエと踏んだ。全く見ていても長持がよい。

野球が終了して、春は晴れやかに廣平に降り出し  
て、あつた。内田君も彼がうきよ込んで  
見ると、新編の年頭に叫び出す。どきどきと息を  
と、内田君も周志遠の熱烈な論議が燃焼して  
ゐる。五月号を連して、度々見ると、度々  
周志遠の著るしい進歩振りが見える。訓練課  
の、号地、研究課の、新編、研究課の、

訓練課の、研究課の、新編、研究課の、

戦後の下に、潮の如く進出して、多分日本と  
打ち倒し、民主日本を勝利の号地を射止ける  
前途をのぞくと、内田君は確信してゐる。

吾の革命的才能や勢力は度々認められ、  
如平見解、新編の、新編の、主眼に証明  
してゐる。

日本帝國主義の、侵略的、侵略的、文化、  
も、足下にも、何と云つた、足下の、  
勢力は、新らしい、民主日本の、  
大なる、任務に、出さ、  
内田君は、補子に、  
して、  
永遠が、

我が、  
始は、  
勝利の、  
戦の、  
傳唐に、  
の、  
中に、

の、

の、

の、

の、

の、

の、

# 白 傳 しみおし児

## 第一回

私の故郷は越後の山奥、信濃川のよゑ地帯の山間  
 山に囲まれた小部落である。その村は地主といふ農  
 主も出はれる程の、物持ともなく小作農と半小作半  
 自作の農家といへなく自作農位のものばかりであ  
 った。従つて村としても非常に貧乏しかつたが早稲を  
 暮しをしてゐた。

私の生れた年も多聞に波がす食ふ上無しと  
 出た小作農で、出来た米が年貢を納め、借金  
 を返せば、その日から又借りがおぼ暮して行くとい  
 ふつた暮し方だつた。然し是うした中でも私は祖母や  
 父に可愛からぬながらも育つて来た。

祖母は相当地つかりしてゐたので村で評判が良かった。  
 た。だが父は、甲斐性無しと罵つた。だから祖母はよ  
 く姉に私に對して、お前のおひいさんの代には一寸の地  
 ぢも有り、村でも評判が良かったものだから、今の代に  
 暮つてからからさし駄目だ、少しばかりあつた地ぢも  
 50. 此手に養育し、も少しあれば甲斐性があつた人



私が六つの年に父は後妻に嫁いで来た。後妻のま  
 は私を知らぬ。然し話にはよめばとても私を愛し  
 としてくれたさうだ。だが今度のうちには私に身  
 當つた。その後妻は天理教宣教師の娘でひつこ  
 つた。私をまづ、お前をたいに親無しの子は何処へむ  
 行けしなむ、云はれた。でもお人好しの父はそれに対  
 して何も承へぬ程氣が弱かつた。

そして私にとつて、その父は今まで父と信じて来た  
 然しは實は父の父でなく伯父であるといふことも  
 その後妻から聞かされた。

その中日教の経に使つて、益々私を虐めるに及んだ。  
 そして祖母も亦後妻から邪剣に振はれた。後妻は  
 私に向つて、私を前にして他所の人に、私を父無  
 し児と罵つた。手の無い児だと思つてゐたら此の児  
 はよく暮があるね、と云つてゐた。

心算の承者の父母はかうしたの出来事、死んでし

私は訊くといふ處に誰か居るに違ふ事だ。それなら、  
は訊くといふ處に誰か居るに違ふ事だ。それなら、  
私は訊くといふ處に誰か居るに違ふ事だ。それなら、  
私は訊くといふ處に誰か居るに違ふ事だ。それなら、

私は今に至るまで其の父の姓を知らぬ。然し  
人々の話を綜合して考へて見ると、私の母は五式に  
結婚した。その中に私を産んでしまひ、其の事を知りて

人の口も言はず、且つ双方とも家は貧しいので  
河内にて一旗上げやうと南洋だか南米だか(然し  
へ行つた。と云ふのが本當らしい。で、私の母の伯父

に當る今の養父に引取られて育てられたのであ  
る。又或る人の話では帰つて来たとき、お父さん  
が、お父さんには居るか、と云ふことになり、矢張り

判らぬ。その中私の小学校へ行くと、孫になつた  
町(働かぬてゐる叔母(祖母の末娘)知り習(養母)  
は、私のために文房具や教科書を買つて来てく

れた。祖母は私の教科書や文房具の都合が  
つたに因つておとことして非常に愛んだ。私  
は、  
紙しかつた。

私はその時買つて貰つた靴や履は、小学校を  
卒業するまで使つた。だが靴は違ふ。おとことして  
小さくなり、又破れたりしたので何回か祖母に

して貰つた。

私は二期期に進んで、祖母の養父の意を  
長く、祖母の意をしまつた。又(養父)は、  
進んで、祖母の意をしまつた。又(養父)は、  
進んで、祖母の意をしまつた。又(養父)は、

祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。

祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。

祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。

祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。

祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。

祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。  
祖母の意をしまつた。祖母の意をしまつた。





もしも... 又学校... 遊んで... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり... 遊んで来たものを待つておまわり...

母の行状に折つた家世の運命に思つても是れ程

の事だ。母は出た後には自ら事をすゝまといふは

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

た。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ

和を可成がてんれた。

祖母は店の子供達の古着を貰つて縫ひ直

して着せて私が行くとき着せてくれたりした。上

人は私が帰る時手をつけて帳面や墨や筆

算店にある孝用品を私にくれた。そのお蔭で

私と孝用品の心配が少なくなつた。孝用品の中

体さうした私を産んでゐる。悪くしてゐる

者もあつた。

私にまつては寂しい事だ。村の家よりも歌やか

体をして祖母の居る所の店が好きだ。だから

泣いて帰つたこともあつた。然し帰れば私には

仕事か請を受けてゐる。

私は去年、四年の頃から激しい労働をやら

れた。学校がひびくとすく下田畑におた。田植

元麻の化しい時期には毎日、地所の家の口を

歩いて行つた。暑く上と山の道がきつた。こ

に年が暮るの日に帰る。冬は寒く、雪が降り

とで、あり。私の部屋で冬は寒く、雪が降り

あつた。母は心もいふも無縁に叩いてゐるの事だ



時までも麻の皮を剥きかきかつた。何れも其邊  
 は道草を食してゐても和た事を本知事さま  
 かたじけなく引取りと真意々にせんて  
 つて謹んで申し上る。先事ニても亦其邊  
 に悪く云はれた。

此の外、屋様の身おろしと道草とは私の任  
 事になつてゐる。祖父は他河の家の身おろし  
 に頼まされて行くので自分や家のことをかまつ  
 てゐる暇がなかつた。だから私は朝起きると  
 一面も積つてゐる雪に道をたづんでお粥を食  
 べて済まして学校へ行きた。学校から帰ると早  
 延屋様の身おろしにいかゝるのだつた。然し大雪の  
 年などは十杖の私には学校を休まねば行け  
 ない切れなかつた。

そんな事で、私は積習や宿題の解答も  
 おぼろげな行山のことすら未だ、夜仕事か終へ  
 てから家に入つてしまふ。それらも後妻がやるまゝを  
 燈の下で行つた。それらも後妻がやるまゝを  
 燈の下で行つた。それらも後妻がやるまゝを  
 燈の下で行つた。それらも後妻がやるまゝを  
 燈の下で行つた。それらも後妻がやるまゝを

思うに、此の世の神で私は尋常科を

した。先生も尋常科に配してゐた。我  
 々の人達も心配してゐた。然しその時  
 中も二つで、私に二つは私を知つてゐた。  
 後妻は尋常科の子は尋常科だけで居た。

してゐて、私を町の生神岡屋へ小僧におし  
 した。私は同じ年頃の少年達が新しい服、  
 靴、新しい靴で中学校へ通ふのを羨み  
 ながら、暫くその店で働いてゐた。

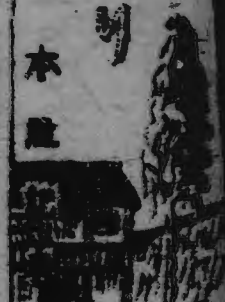
然し、暇もなく後妻は再び町では、  
 少なきおれらと云ふので、私を東京の築  
 色工場に小僧として奉公に出した。

私は大正四年三月四と云ふ契約で身賣り  
 させたのだ。私の小僧生活は二小から始まる。



# 和事村便り

本誌



十一月四日、軍政部調査第五組習少将一行の本村へ  
来り、村民の生活を親しく視察された。

六日夜には村民の心づから歓迎遊藝大会が催され、一行の  
長途の勞を慰めた。尚翌週下は村民に慰勞金一封と贈  
はり、村民は何時までもがうらやましい中、國の厚意に深く感謝し  
た。

十二日、中國革命の英雄中山先生の生誕記念日で  
あり、村民はこの意義ある記念式典に参列し、蘇赤軍  
の偉大なる業績を偲んだ。

十五日、東亞先鋒支之會主催による、東亞先鋒第  
二号の合演會が開かれた。二号に擁護された論議、最  
近日本経済の面、五國會議の軸心と反す影響、

軍事の機密にまつた在華同胞に告ぐ、和事村村民同  
答、ハフイ、金會費はハフイ、各報日天を熱心に  
具剣に批判討論し、来り更りももたぬと誓ひあつた  
のである。

二十五日、東之會主催の第五回討論大会が催された。

大の賑わいを見せたりとある。野波を風目たゆ々と振る  
舞い、こゝろ日本革命に結ぶつた友之會員の偉大  
なる力を感懐する。

二十一日、和事村に於ける秋期合同慰勞祭が執行され  
た。日本でも大ムが引きたれた。談事の犧牲者となり、走  
り、故郷と離れて或は軟弱の夢がう醒めなまに異郷の  
心と化した人々、或は乙シムムの舞臺を認識し、日本革命  
に全力を注ぐ人々として、志中燃れとして舞った人々……  
村民は萬感交り胸に迫り、満場涙として聲なき中  
に涙に式を終了した。

十二月六日、李任波と鹿地亘先生来村！  
日本革命の在華日人の擁護者とも宜し。我故中國に於  
て、義理の旗に奮起して、ある先生の遺稿は、今和事  
村に置り、エフである豊隆金子に、異常な感銘を興え  
た。全村民に興えた清濁こそ、現實の境界状勢に  
處する正しき日本人としての歩むべき道を指示したも  
のである。全村民は深く感えさせられたのである。

先生と共に重慶に赴かれた。山川、岸本、澤村、幸  
雄、五同志の先頭を導き、我等は萬感の舞臺を以  
て述べた。狂ふも、後さ守るも、自衛隊はフ  
日本フマシタカ存剣。

# 編輯後記

客観的音界の趨勢は既に民主勝利を決定した。と同様に我等は茲に一九四四年の新年を迎え一踏、相平建設に邁進せんとす。

本社は持た本號がウ、相平先鋒と改題し其の任務の一端に資さんとするものである。

本號の日本回題持費は本社の最も誇りとして他の追随を許さぬの本社獨特の編輯である。同胞各位の熱讀を乞ふ。

本社は第三號と本年の「相平建設」の第一巻として同志各位の贊助に應へんとする。

同志諸君、本年こそ確實な足取りを以て、日本人民革命の前途を邁進せん。

人民の旗は高く掲げられぬ

(一文)

社  
本誌編輯の文章は必ず本社にの希望の場合に必ず本社に報告さし水同意を得られし

隔月發行

## 和乎先鋒

第一卷 第三期

民國三十三年一月五日發行

編輯責任者

長谷川敏

印刷責任者

舒 慈 僧

印刷所

和乎先鋒社印刷局

發行所

貴州 盤龍 相平村

和乎先鋒社

社長 莫敬儂





PEACE - PIONEER

3.1.1944

和平先鋒

日文版



和平先鋒社發行

☆表紙 ☆卷頭言

在華日本人人民は斯く門へ

日本ファシストの対華認識批判

日本軍部の国家経済破壊

日軍の防備構築と中国戦場に於ける弱点

長谷川敏二

秋月敏郎三

長谷川敏六

奈尾勇一〇

草林信也二

友の会編集部一五

時局展望

時局 統制経済の裏面を覗る

統制下の

労働者生活……林良次八

危機に瀕する

農民生活……野本家六二

戦時下の

特殊部落民……片山康二

戦時下の

炭坑労働者……川下末松二八

日本の

国民學校

健本

✕ 和平村便り

絆を断ちて……中九根三六

台湾の沿革と解放運動に就いて……林雄光三

門への後……市川賢則六

みなし児……樺井勝四

一年を顧みて……新井敏男七

聖兵鋒友の會歌……池上家次

編輯後記

◆ 編輯後記

# 卷頭言

東條は叫ぶ……

『決戦体制』と

マニラ群島に大軍米軍が上陸した。カロリン群島とマリヤナ群島は連日の空襲に脅かされてゐる。

日軍最大の海軍根據地トラツク島は既に覆滅されんとしてゐるのだ。  
南洋委任統治各島は空前の危機に瀕してゐる。

若し日軍が南洋制海権を奪取せられたら、フィリピン、海南島、台湾の輸送基点は遮断される。

結果は明かだ。シンガポールを中心とする南洋派遣軍の全兵力は、丘に登つた列強と同じだ。

折しも、東條と島田は、陸海軍大臣と、参謀總長、軍令部長を夫々兼任して軍政と軍令を一手に掌握し、統帥を強固にした。言ふ迄もない、決戦体制の爲だ。

同胞よ！

いよく杖は進ませつゝある。我々は血湯を肉體を禁じ得ないのだ。

どうだ

この決戦体制こそ、我々日本人の独裁者に対する座席の勝利の前哨であり、民主革命の前夜であるからだ。

同胞よ！、我々も東條に對して『決戦体制』を準備せねばならぬ。

さう！、同胞、我等は

優勝の自信がある！

致



# 在華日本人民は斯く闘へ！

秋月敏郎

反シムハ聯合陣線勝利の方の噴流が全球を轟かしてある今日、我々は日本人民解放斗争史上に無上の光輝を放つた三同志殉烈四週年紀念日を迎へる。

一九三九年十二月十五日、反フアシヤハ日本人民陣線の海外派遣隊たる任務を帯び、抗戦中国軍民の絶大なる激勵と熱声の中に、變忍なる日本侵略軍隊の鉄鎖より解放され、抗戦中国の手に抱擁されてゐた天賦の日本人民解放斗争の先覚者等によつて結成された在華日本人民反戦同盟西南支部は、直ちに当時南寧を侵襲してゐた日軍の北上の企圖を密偵せんとし、崑崙山の防線に果敢な死闘を繰り出す中国軍と配合し前線工作隊を出勤せしめた。

桂南の戦野には、光榮なる優異者の重大級の狂吼を制圧した日本人民の真理の雄叫——言葉の彈丸が放たれた。空制と欺騙に呻吟し、強敵を彷徨する日本兵士——我輩させられた貧民大衆——の眼前に醜惡なる侵襲者の罪状とからくりは余す所なく曝露され、日軍兵士の支配者に対する怒憤と反感を激発し、皇軍士の士氣は見る影もなく喪失され、指揮系統は混乱し、作戦不能に陥らしめた。驚愕した侵襲者等は、海軍航空隊を出勤せしめ、桂南戦野一帯の首爆を以て自己の狼狽を蔽ひ、士氣の挽回を謀つた。

銘記せよ！二月三日、同志松山、鮎川、大山は血肉を以て中国抗戦と日本人民解放斗争が全く一体であることを実証したのだ。桂南の戦野には抗戦中国將士の熱血と日本人民解放斗争の戦士の熱血が混流した。三同志は血肉を以て在華日本人民の任務の最高のものを果してくれた。

即ち三同志を始とする我輩の前線工作隊は、侵襲者に対して荷重なき打撃を予へた。かく、中国抗戦將士の士氣を如何に鼓舞したか、英陣中国の抗戦が軍に中華民族の解放のためには戦はれるだけである、全連東民族解放のためには斗ふのだと云ふ先聲ある斗争の目

一日は手を握るも、目の前には異証され、抗戦勇士の奮起は、我を奮起せよ！  
二日 後四ヶ年、我々在華日本人は、三同志の血の指標に従ひ、侵略者に対する決闘を加緊  
した。即ち、敵度の前線工作に於いて、又は対日宣伝攻勢に於いて、中国抗戦との協力を  
益々加強して来た。

馬志松山、鮎川、大山、よし、  
四年後の今日、日本人は、打倒日本軍部、絶対権力斗争の最後の關頭と立ったぞ！  
我々の死敵、日、独、伊、侵略陣線は、己にその一角イタリイを、同盟軍及びイタリイ人民によ  
つて破壊され、ナチスは最後の足掻きに七瀬八倒してゐる。ソ聯は、己にポーランド境界を突破  
し、ナチスの牙城に迫つてゐる。ナチス鉄蹄の蹂躪下に呻吟して来た全歐洲の人民は、長年ナチス  
の武裝蜂起を以つて、同盟軍の支援と呼応し、ナチス侵略軍の後方は、大混戦の巷と化した。  
ヒトラー、ドイツの消滅は、民主聯合國家陣線と、ドイツ民族を絶つとする全歐洲民族の反抗に  
よつて、目前に決定されんとしてゐる。

対日侵略の根は、連連した。孤立無援に隔つた日本侵略者は、中国抗戦を軸とし、怒濤  
の如く押し寄せる聯合軍の総反攻に備へて、遼東遼寧山の築城と、長期八ヶ年の消耗戦に捲り取  
られ、骨と皮の同胞を、取られ、七國と、鞭打ち、母國の焦土化を促進し、同時に占領区に物資掠  
奪の加強、人民の欺し取りに狂奔してゐる。だが、吾等同胞のみならず、遠東全民族の餓死的  
奴隷奉仕と、幾千万の屍を土台にする、堡壘山が、全遠東民族の解放、平和と自由を保証した  
中、英、米を主体とする民主聯合陣線の突進の前には、如何なる効力を發揮し得るか？、それ  
は、逆に日本軍部のアラストに對する反感、義憤を、爆発の頂点と押し進めるだけだ。

我々は、対日総反攻の前夜に、次の事実を明瞭にする。  
一、日本侵略者への唯一の希望たる、聯合陣線の、離脱、根絶、要協との陰謀は、聯合陣線

の、完全消滅の他の、

二、軍事のアジストは、可成り評価し、真に九は七回、四難」とこの危機を全同胞に  
 集む。全固を集中して、兵器工業化し、せんと四民の全このものを国家権力で剝奪し、一相み  
 の大金融資本家にくれでやつた。此のことによつて四民と支配者——戦争で犠牲にされるも  
 のは戦争で此の上もなく肥え太る者。此の間の溝は三の上もなくはつせりと堀り下せられ、  
 誰れが七回戦争の犠牲者かを四民は、はつせりと目覚めた。此のことにより従来の階級とし  
 ての日本人の解放戦争は、支配者対四民の一大四民運動として、及ぶし大の運動を展  
 開し、戦い来る盟軍の日本と土壕を、此の決戦に拍車をかけつてある。

三、遠東各民族の解放戦争は、英雄の中流戦を軸とし、及日斗争を加緊し、侵略者の「欺し取り政  
 策」を破壊してあり。又西南太平洋諸民族は同盟軍の支援に積極的に参加し、日軍の迅速に劣  
 りてゐる。今や植民地の解放戦争は日本侵略者の消滅を目前にして活躍を極めて来た。

四、東洋軍勢中と若りる共産の反戦厭戦の教化。長期消耗戦による物質的・精神的不調、兵員の不足か  
 ら来る兵士の体力の低下と、それとつり合はぬ勤勞・練習の増加に對する不調、長期戦に對する不安  
 は刻々と増大されて行く。聯合軍の力量により、勝利の信念を失つた不安等々の原因により、軍隊中  
 には反戦厭戦の空氣は昂揚し、自殺・逃亡・投降・兵士は離散、軍中の士氣は混乱されて来た。

五、及日本軍部絶対権力の反華日本人の力量は、「民主暴建設」侵略戦争及對上の軍士目標の  
 前日集結され、四年前とは比べべものなる激堂の陣を完成し、其の他の聯合国内に於け  
 る日本軍部絶対権力的日本人兵と呼ばれ、及ぶし大の聯合陣綫——抗戦中四、遠東民族解放斗

争と日本人兵の新民主日本を結ぶ強力な経路、心なき任務を強力に遂行して、ある。  
 及ぶし大の民主聯合国家友人諸君！ 抗戦中四の友人諸君！ 同志松山、鮎川、大山よ、

我々日本人兵は勝利する！ 日本軍部絶対権力は撲滅される！  
 我等日本人兵は、三同志の血の指標に邁進し、及ぶし大の民主聯合陣綫勝利の中に  
 其の民主日本を奪取する

(兎)



暗策計謀し実施してゐる。だがら當時七七事件前の軍部のヤリ方は明瞭に具體的に分類を

見よ。西南問題、華北問題、内蒙問題に對する。日本特務機關の活躍を………  
全く國民政府に對して反中央勢力の増大の爲に、精密にして用意周到なる謀略を  
以て當つてゐる。反共、防共の本案は日本軍部の良き宣傳口号であつた。

だが此の軍部の基本認識は、完全に誤つた認識から出發した諸工作は見事に  
失敗した。中國辺境各省並に各勢力は、日本の必死の工作にも持ちあらず、日本に對して帝  
國主義的侵略の野望を看破して、反侵略、反帝國主義の旗を勇躍に掲げて、國民政府

の中央集權下に統一帰服して、將委員長領導下に一系集れぬ。步調を以て國民  
革命の完成に邁進して行つたのである。實に中國に於ては、多くの愛國の志に依つて近代國  
家中國の新しい生命、第一日本軍部が認める認めないに拘らず、古き般を覆つて歴史を塗り上  
り、あつたのである。

斯うして進んで來た統一、五民主義文化運動は日本軍部の執拗なる妨害にも拘らず、全中國  
を貫通して石だつたのであり、僅に五千萬の中國人は、此の道義的志忠愛國精神を携つて、中  
國國民黨を中心にして統一歸服を果つてあつた。

日本軍部は此の方向を新し、中國文化の成長の毒を過小評価してゐたのだ。そして此の力量  
を革命以前の地方的権力と同一視し、革命中國を以て、内亂の中國と認識し、徒らに反  
革命的暴力及動員力を濫に發動し、中央集權の妨害を實施し、是に依つて中央國民

政府を控制し、國民政府の体を日本軍事権力の前に、盲目的服従をせしめんとしたのであ  
る。而して是等の企圖の一切は失敗した。

華北專横自治の美名を以て華北建權軍等軍を討り、更に冀察政務委員會の干渉も失敗  
も華北農民自治運動と稱する及中央謀計も挫折し、冀察防共自治政府も、中國民衆の

長債の所起の前に崩壊した(遼州事件、廣汝耕の引退を見よ) 暴動より終途への進  
出の中國軍の痛害の前にも瓦解した。(西靈廟事件を見よ) 一億圓の資本を以て、關東軍  
參謀長板垣征四郎の私設經濟政治參謀十河信二を社長とする經濟榨取機關、興中公司  
(本社在天津中原公司)も、美米の資本力と、國民政府の賢明なる外交の前に營業不振に  
陥り、内地の金融資本家に駕倒されるに迫つた。

一切の政治的、經濟的謀計は頓挫した。是等は全て彼等自身即ち軍部の對華認識の誤  
謬から出た當然の結果であつた。而し彼等は此の責を自ら負ふことをしなかつた。

彼等は此の事實を「暴戾支那」の表現を以て國民に宣傳した。そして最後の手段として  
彼等の對華方針の一切の失敗を番長無智の軍人大衆の肩に轉嫁した。即ち七七事件對  
華武力侵略を以て、一切の失敗を番長無智の軍人大衆の肩に轉嫁した。即ち七七事件對

華武力侵略を以て、一切の失敗を番長無智の軍人大衆の肩に轉嫁した。即ち七七事件對  
華武力侵略を以て、一切の失敗を番長無智の軍人大衆の肩に轉嫁した。即ち七七事件對  
華武力侵略を以て、一切の失敗を番長無智の軍人大衆の肩に轉嫁した。即ち七七事件對

此處に我々は更に振返つて、日本人の對華認識とその常識を検討して見よう。  
多くの日本人は中國について、支配階級より如何なる教育を受けただであらうか？

支那人は暗愚である。民族心や愛國心がない。滿洲、賭博、内亂……是が支那の姿である。  
……と言ふのが、日本人が自己の政府から教へられた中國觀である。……恐ら

く現在でもそうであらう。  
日本人は、新らしい國民革命進行中の近代國家としての中國について全く知らない

のであつた。  
是れは中國と日本人の爲に國交上最大の障害になつてゐるのである。是れは中國に對す

る先入觀的誤認は、七七事件後、中國各戰場が日本兵士をして、言語に絶する暴行  
をせしめてゐる。

是等の一切は日本支配階級の負ふべき責任をなすければならぬ。  
……

精神に依る團結力、偉大なる三民主義國民運動を日本人民に紹介してこれなからしむ。侮辱されたのは中國だけではない、何も知らぬ日本人民も同様だつた。

日本には中國に對する科學的認識は全くなかつたのである。だから八年に渡る聖苦抗戦が日本人民にとっては全く不思議なのである。あの忍耐力、あの闘争力、一兵一卒の何處から發露するのであらうか？

日本人民は全く理解出来得ないのだ。日本軍部手製の「支那浪人的中國觀」は、此の答辯は出て来ないものである。

我々は此の舊い中國觀を徹底的に粉砕し、一種せよばならぬ。先づ進歩的な日本人は「支那」をどう言葉から廢止すべきである。そして正確に科學的方法論を以て中國を正しく把握せねばならぬ。今迄日本人が中國につけて来た侮辱的常識は中國それ自身を害してはならない。

金文若、外國帝國主義、特に日本帝國主義の強制したものである。

笑例、今迄の華北の鴉片の密貿易は日本劍の暗躍と援助に依るものであり、賭博、花柳の巷、等の犯罪的存在は全て外國帝國主義の特に伊太利、日本等の強制政策であつた。

見よ、天津、上海、イデライ、其他の大規模な賭博設備を、皆んなイタリヤ人や日本人の作つたものだ。逆は中國に於ては、蔣委員長は嚴に此の様な墮落的習慣を禁止せられてゐる。

新生活運動は是を突証してゐる。

そして歴史的事実である中國國民革命と中國民衆の文化的成長と發展と認識し、新しい世界再建の支柱である中國を世界大同の和平精神を忘れてはならない。

そして日本人民は、友邦人民に對する友情を持つ事が出来ると共に、自國の爲政者の罪惡を知る事が出来るであらう。

# 日本軍部の國家經濟の破壊

大衆

五月

今次東洋大戦の戦時勢は同盟軍に最も有利な條件となつた。其の彼の形勢は、公衆の意、より甚く是に  
増進し、戦止を期す自イタリを戦が、其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

その外千口又ラッセルが、其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

此の事実は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

日本の独日海軍の強弱、其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

日本軍部は、其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。

10 この行の、其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。其の意は、同盟軍に強し、強軍に大前意を不へてなる。





日軍、防備森然と

中國戰場に於ける弱點

平林信也

現在日本は、その強盛に於て一番重大なる問題、中日事變の解決は、最早巨大な戦力を  
消耗した今日、全面的な武力攻勢は到底不可能な情態と化した。

而して、南方及び太平洋に於ける英米同盟國牽制の威脅は、此の巨大なる戦力の消耗と相俟  
つて、全面的な破壊を惹き起すし、その事態を刻々と切迫せしめ、ある。

日本は、その強盛に於て唯一の希望、それは同盟國相互間が政界、貿易問題で内部に磨  
礫を生ずるのを待つて、其の時期に自己の防禦條件を鞏固にするに在り、此の希望は最近の同盟國內の望望は政治軍事方面に於ける進歩の合作加緊によつて、  
それすらも泡珠となつて来た事は、明白な事實である。

この點に至つて日本軍部は、此の巨大なる占領地帯の全面的な防禦線を如何にして保持す  
るか、と云ふことが問題に於て来てあり、その爲に日本軍部は極力戦力の消耗をさける  
と共に、その警備地帯に比較的防禦條件の確立してある個所まで全面的に縮少してある。  
又、さうしなればやつて行けなくならぬ事を、来た。

この點を東来ラシオは國民に次の様に云つてゐる。

米國は、ニエトプリチン及びニキギニアに於て自己に制空権を獲得した。盟軍の日本を爆撃  
は、もはや免れることは出来ぬものとなつた。又同時に敵機は中國の據点より牽制する  
であらうと云ふ。先づ太平洋、中國戦線方面に於ける日軍の準備態に於て考察して見やう。

朝鮮半島は日本軍部にとって、政界の重要據地として最後の防線であると云ふことは、去

好條件を具備して、昭和十二年頃迄に本格的な不永久軍事施設が完成してあり、彈藥、軍用糧秣倉庫等々は全部陸揚して、飛行機の爆撃にも十分耐えられ、米國海軍も普通の手段では一丁近づくことはむづかしいであらう。

南洋方面、これは日本がアラスカ、露露の資源の源泉地として事更前より宣傳に政治工作に事実泰國に對する軍事地援助等の如く、あらゆる手段を盡して、資源の獲得に狂奔して所謂生命線である。

現在軍需品の輸入は本國に昭和十二年頃設置した船舶輸送司令部を起點として、台湾、南洋、海峽島を兵站基地とし、中支方面に使用してある運送船を抽出して是に當て、ある、

形行基地としては、香港、汕頭、廣東、天河、自來、仰光等が主要基地であり、若軍糧基地として兎全に使用出来るものも、恐らく台湾の澎湖島及び南島位のもので、マニラ、シン、香港等はまだせれば、この軍需は出来ぬ。

現存日本軍需は、極東、東南、マニラ、シン、の南方の線に非常中に重現し、中支の精銳部隊（第四師團、第六師團、第四師團、第三十師團、第一師團、第二師團、第三師團）を抽出して南方に送つてあり

又近世保を基地とする第三艦隊の主力が向けられてゐる。現在中國戰場は、何と云つても日本本土に最も近接してゐる處で、其の處で、軍需は中國に於ける同業國の軍需基地の出来るのを恐れ、度々軍事機密破壊の目的で作戦が行はれてゐる。

其の典型としては、第一回日露同盟、日本本土、煤業が行はれた直後の滿鐵作戦の如き、そして大本營の命令で、作戦基地の破壊が附加要求されてゐるが、其も証明される。

日軍は現在極東戰場に於ける中國及同盟國の反抗を、中支戰場の精銳部隊を南方に送つてゐる、南方に派遣されてゐる陸軍の兵力は、そのうち、二集團以上は、のほろぼりう。

その兵力不足は、新設部隊の補充に於ける、この點に於て補はれ、たゞ、勇敵を退けてゐるに過ぎない、状態下にある、よつて中國戰場は、全般に於て、手薄になつて来た。最近の

日本軍の準備態勢は、非常中に變つて来た。それは、前線に主力を集め、後方の中支地を

（以下は、文章が非常に暗く、読み取れない部分がある）

東上り野原の邊に在るにこの川は、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、

流れて居るが、昔は、海に注ぐに依つて、河内より、北に流れて、今も、



強は今日遂にトルコにして民主聯合會組織  
五洲の泰をむる

最近の力イ品に成りる英(工)歩議會議はテ  
(ラ)會議の具俸化であリテテニス社連長委員の  
成日會議(バルカン連成)組織である。

希臘國の對德東西南全島軍勢故事は着  
目と實情を對してある。

●バルカンの諸國の動搖。  
ブルガリアとトルコの關係は頗る自及の聯盟國のハ  
ルカン連成の關係と夫ハトルコ軍はトルコ  
軍と上し。

ブルガリア全大軍の百才の八十餘を占める  
軍長はバルカンの連成軍に對して金糧の  
供給を拒んである。

更に本島總督會志越後の有知は全國的  
に對して觀望流着所設に故軍連成を起つ  
てある。

國境國境の軍力増進下にブルガリア陸軍は  
強は行戦決意をせし出した。ブアベスト電は  
は強まると、軍公公意と感述し、故軍軍勢は  
パトコリ等の覆轍を踏まんとしてある。

ル一五五五、蘇軍の油日凶連連、トルコ  
軍力増進、ブルガリアの動搖による環境の

トルコ軍はトルコ軍の油日凶連連、トルコ  
軍力増進、ブルガリアの動搖による環境の

トルコ軍はトルコ軍の油日凶連連、トルコ  
軍力増進、ブルガリアの動搖による環境の

トルコ軍はトルコ軍の油日凶連連、トルコ  
軍力増進、ブルガリアの動搖による環境の

ギリシアと又騎標決して来た。アントネスコ独  
裁政權も連日動搖し出した。  
此下マニア全國軍工廠に又トライキは高漲  
し政府は工廠内水軍、兵令を控いて労働大衆  
の反抗を鎮壓せんとした。ガ、ルマニア人民の  
反抗も漸正する事不出来ず政府は独裁に對し  
てバルカン方面の合作を拒絶した。

今日ルマニア大臣の停戦、和平希望を  
切實なものとして政府に運つてある。

●ポーランドの解放運動。  
ポーランド國境には已に全國會議が成立し  
た。この會議に参考してあるのは、ポーランド農林  
中、社会主義党、労働党、其他民主解放者  
團體の代表である。該會は不動の決心を以て  
ポーランド共相國の全數解放と復讐を以て  
取す事を宣言し、宣言を發表した。ポーランド  
愛國團先遣中工員代表。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

蘇軍はポーランドに進入した後、ポーランドの  
解放運動と聯繫を存して、對德作戦を有  
利に展開してある。

輯

特

# 特殊經濟の裏面を覗く



統制下の労働者生活

..... 林良次

危機に瀕する農民生活

..... 野本家六

戦時下の特殊部落民

..... 片山 康

戦時下炭坑労働者の生活

..... 川下 禾松

日本国民学校風景

..... 野本 明

# 荒削下の労働者生活 林 貞 次

神戸市兵庫区五洲町四丁目十五番地に川島五一郎(三十五)妻廣枝(三十九)葛枝(十八)進(十四)里子(六)の五名家族がある。

彼は三十六才の時、同じ東京市町五丁目大久保鉄工所に仕工として入社してより昭和十五年に至る迄は月給九拾圓余りの金で知々ながら平和な生活をして来たのである。この平和な家庭も戦争が不意に襲った。昭和十六年六月政府が徴収した「賃金統制令」及び「強制貯金令」の執行、今月迄の月給が五拾圓余りに減少したのだ。其の爲に親子五名の者はこの空欄な賃金で飯飯と食費のどん底で苦しい生活を遂げなければならない。

それでは川島氏は「日本が戦争に勝つ為だ」と信じ朝早くから夜は残業道して「鏡夜」の務は俺達で」と許りに汗と油に汗を流しなう。一生懸命仕事に従事して来たのである。

つかない連君には辛棒が来なかった。その爲に度々人の物を盗んでも生活にあてゝ来たのだ。そのことが警察の知るところとなり、連君は港川界に投獄された。川島はそれを知り警察に駐り子供を罪を脱が、涙ながらに叔母を嘆息したのだ。だが司法主任は熱情にもこの情れを親の顔を見聞さ入れなかつたばかりで連君を捕縛の少年刑務所に送り、二年の刑が言い渡された。此の通知を受けとつた川島氏は毎日、連君の事を思ひつ

だけ悩んで来た。その爲に作業にも手が付かず、おろ／＼やら仕事をすると云ふ具合だつた。前より以上に賃金は下がられてしまった。又嫌の葛枝さんは昭和十六年九月に廣島市宇高町四丁目金華又胡に徴用されて住み、日給八拾先で苦しい労働に従事して居り、この安価な賃金は家への送りも出来ず、又家に手紙を出すにも寮長の検査を受けねばならず、この苦しい生活状態を家族に知らせることも出来ず、泣きながら朝の七時より夜の九、十時まで、休む暇もな

ら一生懸命仕事に従事して来たのである。



この事實は鏡後に教多く隠された中の一例外。労働賃金規則は強制貯金。其の中心は甲、乙、丙と別けてある。即ち、

甲 乙 丙

年令別 最高賃金

十六—二十 …… 貳圓 …… 壹圓八拾元以上…… 壹圓六拾元以下

二十一—二十五 …… 貳圓五拾元 …… 貳圓貳拾元以上…… 壹圓八拾元以下

二十六—三十五 …… 參圓五拾元 …… 參圓 …… 貳圓五拾元以上…… 貳圓五拾元以下

三十六—四十五 …… 參圓 …… 貳圓五拾元以上…… 貳圓 …… 以上…… 貳圓 …… 以下

労働時間の規定時間は八時間であるが、その内訳、監視の下に、ひたすら苦しい労働を續けてゐる。

をすれば、作業開始、午前七時半—十時、この労働時間の無限の延長と増えるべき労働の加重と、負傷者は毎日激増してゐる。この負傷者に対しては、休養に少しばかりの手当をなし、夜

十五分休息) 午後三時(三十分休息) 午後五時(十五分休息) 午後七時(十五分休息) 午後九時(十五分休息) 午後十一時(十五分休息) 午後三時(十五分休息) 午後五時(十五分休息) 午後七時(十五分休息) 午後九時(十五分休息) 午後十一時(十五分休息)

終り。表面上は八時間労働であるが、この表面は、裏面では、労働者の生活状態は、市場の物価は騰貴

の数字に於いて過ぎない。現在では、毎日残業の数字に於いて過ぎない。一週間に三、四回の

徹夜がある。

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

労働者の生活は、毎日の激重である。天引金内訳…貯金一割、

清一罰五... 通職全五分、保身金、保養會費  
 五分、計四割  
 若し全額支給すれば... の安価な保身金  
 で済ませても生活は出暮るゝのである、  
 その為、國內では次第に犯罪が増出してゐる、  
 此の爲、この犯罪者の大半は少年、少女が殆どである、  
 何れ二人、可憐な少年、少女が罪を犯さるゝは  
 何れ一人、可憐な少年、少女が罪を犯さるゝは  
 何れ一人、可憐な少年、少女が罪を犯さるゝは  
 と食料配給制の若くは、底意を犯すした罪を犯す  
 である、

配給制度

米... 一斗... 十斗... 一斗五斗  
 小麦... 一斗... 十斗... 一斗五斗  
 雑穀... 一斗... 十斗... 一斗五斗  
 食油 (神戸市)  
 三人家族... 一月... 一月... 一月  
 五人家族... 一月... 一月... 一月  
 三人家族... 一月... 一月... 一月

菓子隣組配給  
 一月... 二... 三... 四... 五... 六...  
 一月... 二... 三... 四... 五... 六...  
 一月... 二... 三... 四... 五... 六...  
 一月... 二... 三... 四... 五... 六...

綿織物貯蓄制度 (昭和七年二月廿五実施)  
 一月間... 都府... 町村... 八十英  
 夕方... 一英... 一英... 一英... 一英... 一英...  
 足袋... 靴下... 二英... 二英... 二英... 二英...  
 手袋... 二英... 二英... 二英... 二英... 二英...  
 ハンカチ... 二英... 二英... 二英... 二英... 二英...  
 糸... 二英... 二英... 二英... 二英... 二英...  
 反物... 十英... 三十英... 三十英... 三十英... 三十英...  
 背履... 五十英... 五十英... 五十英... 五十英... 五十英...  
 国民服... 三十英... 三十英... 三十英... 三十英... 三十英...  
 方一... 六十英... 六十英... 六十英... 六十英... 六十英...  
 作業服... 十五英... 二十英... 二十英... 二十英... 二十英...  
 絹物... 絹類... 五分、一...  
 綿類... 六割、ス、ス、入り

三人家族... 一月... 一月... 一月  
 五人家族... 一月... 一月... 一月  
 三人家族... 一月... 一月... 一月

21 危機に瀕する農民生活 II

野村家

異国の空から今つくづく郷土をふり返す見ると、あの関東平野の真上に聳へ立つ残間山の煙吐く姿がはつきりと目の前に輝いて来る。故郷を後にしてからもう四年も経つてゐるけれど、さつと以前と同じ様にあの雲の峰を煙を細く長く棚引かせてゐるに違ひない。だがそれにしては百姓達は毎日幸福な日々を送つてゐるのかしらん。只そればかりが心の底に憂き情をこめて一向に離れぬやうとはならない。中日事変が起つて四年目の昭和十五年、其の頃既に農村の経済は次第進行の爲に益々重荷を加へられ、全く窮乏をなつてゐた。其の統治意識ともして救済の实例がある。例へば埼玉縣児玉郡共和村下坂見の向根野田郎(四〇才)の如し、彼の家は昔から

の赤石重徳で、家長は妻トミ(三九歳)との間に二人の子供があり、弟は信男と両親を加へて五人の家族でありました。父親ト吉(七〇才)は長らく病息を患つてゐるが、薬も満足に買はず、春ませることは出来なかつた。信男は近所の牛乳

配達夫として働いてゐるが彼の貰つてゐる給料は小使勤にも足らぬ程かたしので、全く家の足しにはならなかつた。又妻トミも平素から余り健康体でなく、里田郎さんは殆んど自分の力一つで一家を養つてゐたのである。

里田郎さんは非常に正直な人だったので、貧乏な暮らしはしてゐたけれど、村の人達からは信用されてゐた。そして何時も区内の各組役番に推されてゐた。家では事細かに目の廻る程忙しかつた。だが彼は自分の家が主人も兵隊を起してゐる位と云ふと、それから、吾々に村する申次りのために、又御国のために何と御奉公がし度いと思ふ考へから、全く忠実に私慾を捨て、長く働いた。そして公用に費す力のゆめ命を、夜業をして補つた。

勝手元も、廢存も、そして又は奉高も、皆一請くたの狭い家の中に五層の電燈を灯して、畳の代りに筵を敷き、その上で毎晩、藤二時頃まで、時には夜の明けるときは、懐籠み

農業に熱心な里田部と志村、組合の啓略

や幾度かをやらなければならなかつた。さうして大  
 無理から遂に眼病を惹起し、一日と充血は  
 激しくなつて住つた。けれどしそれを医者に見  
 く貰ふ力もなかつた。仕方なく町の藥賣から  
 酬儀を買つて来て、それを茶のうばいにつ  
 いて馬志と溶かし、ガ―ゼに含ませ、食事  
 に使つてみた。着じ狭み、それと毎日、懸命  
 に眼を洗ひ続けた。だがそれとて、  
 眼は悪くも悪がなかつた。かうして幾つか  
 災難は彼の家を襲ひ、借金は益々増へて住  
 つた。こんな風で何かとつけて親や、又姉の面  
 が衝突が甚き起り、一年中喧嘩が絶えな  
 かつた。かうした中にも、村の若い者は次から次  
 へと召集され、次第に違ふて住つた。そし  
 て、働き手の減つて行く村には、又村に政府の  
 押しつける仕事も急激に増加して来て、百姓  
 達は身もたれずと悲憤を言ひ合つた。そし  
 て村の人達が一奮闘した。それは肥料の統制で  
 あつた。政府では増産を名と叫んで農民に強  
 制してゐるけれど、到底その実績を挙げ得  
 ない。これは不可能な事であつた。肝心な働き手

肥料の他に、種々の肥料を使い、研究を重ね  
 て何時も農会主催の土産品評会には入賞し  
 ておた。所が一度統制令が施されると肥料の配給  
 は急激に減つた。和室、燐酸等に於ては、二割程  
 度の配給のみ。其の上施肥の時期を失する  
 弊害も伴つた。もはや里田部と志村は希望  
 を失つて了つた。素の定秋になると枯病病が  
 非常に多くなり、それ以外に、種熱病も増へ  
 て来た。念々調子悪くなつて、今度は白油の心配が  
 加つた。里田部と志村も共同用農動機の仲間に入つ  
 てゐたが、それも地主から借金をしてゐた。  
 脱穀機、その蓄積、米穀機と一通り揃へたが  
 これを使ふには油の配給が足らなかつた。そして  
 誰かが脱穀機は昔の足踏みを使つてゐた。其  
 の上里田部と志村は、米穀機も半分は古く、  
 それと言ふのも高価な油代を支拂ふのが辛い  
 つた。かゝりである。かうして彼は人一倍の苦境を  
 重ねて行く。調子も終りに、ほつと一息ついたので  
 あつたが、出来上つた俵の数を算へてみて、又カッ  
 カリした。そして腰を下したまゝ、呆と立つた。彼  
 は早速、米のやり繰りに困らなげな心なうな  
 かつた。地主に頼りついで、小作料を引いてくかと思つ  
 て見たが、突つ跳ねられて引込むより、仕方なうな

でもいよいよ三條は留めろと出米たがそれでは  
 とうすもにと出米たがそれでは  
 高を売すてうはうかきも考へたが、道所の令  
 今人なをこを本出したらゆり不足許を見  
 られるから止めた方がよいと痛まされて、そよ  
 だけは思ひ止った。友人を以て正月にたそし  
 白餅、餅、道食ふことも出米す、小米を以て粉  
 餅を搗いた。そして麦飯を食べ、又昔々  
 食に世手打らうとて前を命をた

然し裁判の正身はまたその上に覆ひかきつ  
 て来た。それは飯米、炭や其の外一徹農作物  
 の強制徴収であつた。百姓にとりてはむと高、養  
 の方がよかつた。段場から飯米、炭の運送を  
 受けとつた里西郎は、飯米の値が低かりたつた端米  
 の中から又二斗の米を出さなければならなかつた。  
 それに續いて甘藷の徴収が来た。けれども里  
 西郎の象には甘藷を作ら程、島原の  
 である。其の他にも全然甘藷を作つておない  
 ものが十七戸の内十戸はあつた。そして大分、  
 向題になつたが、結局ない者は買つて出すと  
 となつた。出さなければ違反になる。里西  
 郎は血の考を練る所、練り金を握りて

これで終るまで土地獄ではなにか、百姓は  
 戦争を呪ひ出した。早く戦争を止めてくれ  
 が良いが、どうして、えんた長く続えたら  
 う。金吾界のどこに好き込んで戦争をゆえぬ  
 るものがあるだろうか。誰だうて、平和を愉快  
 自、そして、朝らかな伸び出した生活の出米も  
 ことを漏望してゐるのだ。それなのに一向とあ  
 りともなないで赤紙一枚で役達を政場に引ッ  
 けり出す奴は一体誰なんだ。本當に因民を  
 幸福に導く正義の政府なら役達は生命を  
 惜ぐることもないか、びくともしなない。又喜ぶで  
 死ぬことも出米も。然し、あんなうでなにとした

り、因民を苦境に葬る以外ないとしたら、  
 役達は金力を盡して、戦争停止のために、戦は  
 なければならぬのだ。そして、苦んでゐる日本  
 人民を救ひ出すわけが、誰ならぬ、責任が  
 があるんだ。此んな戦争を継続して、因  
 民が救はれるものか、軍部と財閥が、大  
 なたつて、彼等の金儲けのために、惹起した政  
 事、ちやないか、政府が悪いんだ。役達の本  
 の敵は軍部だ。軍部を倒せ、

# 戦時下の特殊部落民

片山 康

今次戦争の長期化は、全日本国民の上にも重大な  
率を要した。それ故に現日本の状態を是す。明  
らかにならざる。特に新平民として討建の身  
非人間的な生活に呻吟せざるを得ない状態に在る  
ことは我々が明らかに認識出来ることである。

戦時中に於ける特殊部落民衆の生活の苦痛  
さに就いての事實は数多く有るものがあるが、  
私は此処に二、三の实例を述べて見やう。

一 岡山縣下の特殊部落は数ヶ所に散在して居り、  
従つて各部落の事情を述べることは極めて困難  
である故に私は全般的に説明することにする。

元来特殊部落民(新平民)は種多及ばぬ原  
を食の名稱を以て呼ばれてゐた。これは討建の  
重身分差別に依る侮蔑的な言葉であり、部落  
民として社会的な生活から脱離せしめる動機を為

しめる一大原因となつた。かゝる故に彼等は二重に  
24 苦を被り現政府に對して村落的行動を採る  
べきものである。

暴動を仰せ、鎮圧方法として市民平等の機  
策を用ゐるに望んであり、それによつて

表面上彼等を日本国民の二員と見せしめんと雖も、  
これは虚言す。も彼等の身分差別を放棄しな  
のではなく、只彼等の暴動を鎮壓し、奴隷化に  
使はらしめたに過ぎないのである。其の証拠に

彼等は地方的組織を失ひ、凡ゆる公職に  
在つても指導的地位を許されず、今この處に於  
いて下級地位に甘んじてゐるものに依つて証明される

ものである。又日常の仕事に於いても社会的に先  
も進むことゝ出来ぬ故に、故に彼等は社会的  
生活を離れ、孤立した生活をなしてゐる。然して

同族間の團結は軍國であり、従つて仲間内  
に於ける相互關係は密接である。

これは、昔は如何にしてその生活を保持してゐる  
かはその彼等の職業種目を見ても明らかである  
あり、且つ又彼等の如何に一般市民から切り離れて

職業と、侮蔑的行動に甘んじてゐるかを如きこと

等であり、果して此の種の職業米によつて生活の安定を得ることが出来ぬか、私はそれらの収入に對しては、述べるべきが出来ないのであるが、彼等の生活状況から推して余り収入のないことは明らかである。まして最近では、過重なる軍事負擔と種々様々な支出に對し、彼等の生活は全く變化してゐる。かゝる貧窮は岡山縣下に於ける連乘寺小作人である。花畑部落の状況が實に物語つてゐる。此の連乘寺の小作人は「アバ」と云つて、寺村の田畑を小作するのであり、従つて寺の經濟はその寺村の所得によつて保持されるのであり、従つて小作料取り立ても嚴しく、そのため小作人は、年中汗を流して獲得した作物は寺に奉納しなればならぬ。然し部落長の生活を基礎としける唯一の方法として小作は村中第一となく、維持され、昭和十四五年頃迄には各部落の七割以上の小作人が居た。それによつて連乘寺の經濟も稍、安定するに至つた。爾來寺は昭和十五年頃から、政時下日本の食糧増産の口実を以て、小作料の最重取り立てを行つてゐる。

昭和十五年頃は岡山縣の農作は不作である。そのための農家の困窮は小作料を細めることか出来ず、部落民は再三、再四、寺に對し小作料納入の猶裕を頼み出たのであるが、聞き入れられず、却つて金納を要求され、寺村農家の抗争となつたのである。

而して連乘寺の小作料取り立ては中止になつたのであるが、その後救済金があつたので連乘寺では早速小作料五割減付を要求し出した。然し、救済金は少く、只形式だけであり、部落民の困難な生活を何等補助する足らぬはならぬかつた。それをも部落民に對するものは全て連乘寺に押しつけられたので、彼等の寺に對する反抗は、益々激化されたのである。そして各部落の約三分の一の約二十六人の活動となり、小作料減額を求めたのであるが、官廳も本署にも意見を述べたのであるが、然し本署でもそれをどうも是置かぬが迷つたのであるが、情況は益々悪化してゐるので、全警官を召集して、自動車に乗乘して部落に急行せしめ、集團する部落民を慰撫せしめることにしたのである。然し部落民は官廳の如何なる取立にも又望外な結果を得ず、却つて益々反抗は強くなり、遂には官廳と農家の抗争となり、相互に抗争

昭和十五年頃は岡山縣の農作は不作である。そのための農家の困窮は小作料を細めることか出来ず、部落民は再三、再四、寺に對し小作料納入の猶裕を頼み出たのであるが、聞き入れられず、却つて金納を要求され、寺村農家の抗争となつたのである。

而して連乘寺の小作料取り立ては中止になつたのであるが、その後救済金があつたので連乘寺では早速小作料五割減付を要求し出した。然し、救済金は少く、只形式だけであり、部落民の困難な生活を何等補助する足らぬはならぬかつた。それをも部落民に對するものは全て連乘寺に押しつけられたので、彼等の寺に對する反抗は、益々激化されたのである。そして各部落の約三分の一の約二十六人の活動となり、小作料減額を求めたのであるが、官廳も本署にも意見を述べたのであるが、然し本署でもそれをどうも是置かぬが迷つたのであるが、情況は益々悪化してゐるので、全警官を召集して、自動車に乗乘して部落に急行せしめ、集團する部落民を慰撫せしめることにしたのである。然し部落民は官廳の如何なる取立にも又望外な結果を得ず、却つて益々反抗は強くなり、遂には官廳と農家の抗争となり、相互に抗争

而して連乘寺の小作料取り立ては中止になつたのであるが、その後救済金があつたので連乘寺では早速小作料五割減付を要求し出した。然し、救済金は少く、只形式だけであり、部落民の困難な生活を何等補助する足らぬはならぬかつた。それをも部落民に對するものは全て連乘寺に押しつけられたので、彼等の寺に對する反抗は、益々激化されたのである。そして各部落の約三分の一の約二十六人の活動となり、小作料減額を求めたのであるが、官廳も本署にも意見を述べたのであるが、然し本署でもそれをどうも是置かぬが迷つたのであるが、情況は益々悪化してゐるので、全警官を召集して、自動車に乗乘して部落に急行せしめ、集團する部落民を慰撫せしめることにしたのである。然し部落民は官廳の如何なる取立にも又望外な結果を得ず、却つて益々反抗は強くなり、遂には官廳と農家の抗争となり、相互に抗争

而して連乘寺の小作料取り立ては中止になつたのであるが、その後救済金があつたので連乘寺では早速小作料五割減付を要求し出した。然し、救済金は少く、只形式だけであり、部落民の困難な生活を何等補助する足らぬはならぬかつた。それをも部落民に對するものは全て連乘寺に押しつけられたので、彼等の寺に對する反抗は、益々激化されたのである。そして各部落の約三分の一の約二十六人の活動となり、小作料減額を求めたのであるが、官廳も本署にも意見を述べたのであるが、然し本署でもそれをどうも是置かぬが迷つたのであるが、情況は益々悪化してゐるので、全警官を召集して、自動車に乗乘して部落に急行せしめ、集團する部落民を慰撫せしめることにしたのである。然し部落民は官廳の如何なる取立にも又望外な結果を得ず、却つて益々反抗は強くなり、遂には官廳と農家の抗争となり、相互に抗争

の犠牲を払ひ、事態は全縣下に及ぶ人とした。事情を調つた縣当局は條規し小作料一年減免陳と云ふニヒトとして漸く解決し、又、米、味噌、醬油等無條件に分配し事件は全々解決された。かくして日本の特殊部落民は社会的生産が中心の権利を奪はれてゐるばかりでなく、強力なる封建主の圧迫と榨取に喘ぎである。これは戦争と云ふ事のためばかりでなく、法西斯が戦争を継続せんとする策畧である。だがしかし今次戦争による日本軍部の失敗と云ふことと原因を尋ねるものである。故に我々は如何に戦争が人類の幸福を阻害するものであるかは以上の事實を以つて明らかに知るべきが出来る。

次に和は此の問題を高一層明らかにするたの更によつた例を述べやう。

奈良縣南葛郡掖上村大字柏原に住する清原一陸氏(五十五才)に關する事實である。掖上村は戸數三百五十戸程の全村特殊部落を成立すると云ふのである。村民は主として農業で生活しており、副業として皮革業を営んでゐる。その部落に住む清原氏は人望の篤い人であり、村内皮革業組合の組合長を、そのとして事業に對しては、

職に在りつ、あつた。然し昭和十四年一月から此市の爲、材料が軍需工業に使用されるので皮革を来し、營業は不可能となつたのである。然し彼は又皮革を考へ、今度は骨を材料に「カウ」製造をするに至つた。これも材料を

大阪の西浜より取りよせておた。それは西浜に自分の友人であり、又同業者者あり、密接なる皮革の下に取引引きが行はれてゐたのである。たが戦争は益々悪化し、その材料にも影響を来し、二月程にして大阪の同業者は皮革の材料の取引は出来なくなり、従つて清原氏の營業も不可能となつたのである。それは今まで南洋方面から移入されてゐた骨が運輸力缺乏のため移入されなくなつたからである。彼等の同業者は止むなく軍需工場に職業を求めざるを得なかつた。ところが以前この部落では、全国、永年社運動の組織的武装暴動に参加した過去が在つたので工場では之等の皮革の木採用を宣言した。此の矛盾せることに對し、清原氏は部落代表と共に大阪憲兵隊長三浦三郎大佐に對し事情を述べた。清原氏曰く、「部落民と云ふだけの問題で就職を拒絶する



如く云うた。君達は赤だから、工藤に働きたければ日本精神に倣えしを以て出直せとさつぱり去るからして新平氏を呼び封建的身分差別撤廃を主張する軍上層部の者達が口先きでは身分差別撤廃を叫ぶ反面、自分もそれを行動をしよう。此の裏から見れば等が如何にその身分差別の撤廃と云ふ言葉で部落民を欺かうとしてゐるかというはれる。次に今一つ例を述べよう。

大阪中東地区中川町一八番地道本喜一郎(三十八才)彼はアラシ工場を専向に経営してゐた。部落出身の青年三十名程集めて年々若干の利益を得て生活してゐた。昭和十五年四月が、運輸の困難によつて材料(豚毛・骨)が素なな

り、経営も立ち行かなくなつた。その後急本氏は中肉に材料が豊富にあり、安価で買へることを帰還兵から聞いてゐたので、早速大阪憲兵隊に頼んで、湖北産の材料を仕入れることにし、憲兵隊に出頭して申請した。然し憲兵隊では本氏が、軍農協時代全国水平社の幹部で思想運動をしてゐたと云ふことで許可しなかつた。そこで貿易方面でも材料は入れは出来ないと云ふ後等、手には行き渡らなかつた。然るにその

面の貿易を主としてゐる軍の御用商人 安宅

商会(大阪の商業会議所会頭安宅弥吉、住友系)は、中支方面から莫大な豚毛や骨や皮革、綿花等を仕入れて自分の直営工場に分配してゐた。然るに部落出身である本工場には少しも分けられなかつた。そのたの急本氏は営業不能となり、西成の親類に妻子を預けて朝鮮に出稼ぎに行つたのである。かやうにして全国特殊部落民は、差別身分によつて、圧迫され、又戦争のため過重な軍事負担を負はされて、営業不能になつて、破産のせむなきに止つてゐる。又一般労働者も部落民と云ふ故を以つて都会の軍需工場には採用されず、莫の生活状態も年々低下してゐる。

又農民にして熟り、一年中の勞苦である作物は軍米とか、小作料に取り上げられ、その見合は生老にも困る様になつてゐる。

私達の同胞は皆かやうにして軍部の圧迫と、軍部家及び地主等に搾取されて、苦しんでゐる。我々はかかる同胞を救ふため、固く最も進歩的な部落民と密接な聯繫を築き、戦争業者である軍部つゞきと打倒に向つて邁進しなさればならぬ。

# 戦時下炭坑労働者の生活

川下 素松

福岡縣志摩郡と云へば殆んど無業地

帯とあり、此の地は三度餘回炭坑がある。此の地は昭和十一年九月始首炭坑に入社し、昭和十五年九月迄約五年間、昭和炭坑の一炭夫として働いて来た。

其の間炭坑下の労働者は炭坑に比較して、どんなに苦んで居るか、此の炭坑に比較して、仕事を簡單に述べて見ると、入社當時昭和十年頃は物價も安く、一日の賃金は三月乃至四月程度であり、生活の妙處も、因り自分の好きなものは自由に入社することから来た。

炭坑で使用する燃料等は坑内の首坑末(支柱に使用するもの)を使つてゐたので、一般には不自由なく生活することから来た。特に炭坑者は一日俵銀三四月の中、食費は代四十銭と二銭の炭坑代を支拂ひ、非常な難境ではあつたが、衣食には不自由

の送金が出来た。

次に労働時間として、採炭夫午前六時より午後五時まで(一番方)午後五時より翌朝午前四時まで(二番方)掘進夫午前六時より午後三時まで乃至四時まで(一番方)午後五時より翌朝午前二時乃至三時まで(二番方)仕操夫午前七時より午後三時まで(一番方)午後六時より翌朝午前二時まで(二番方)作業が多分の休息もあり、仕事にも多少の自由があつたので、余り労働の苦味を感じて居た。

俵銀は採炭夫、一番方 三月五十銭乃至四月程度、二番方 三月乃至三月三十銭程度、掘進夫は一番方 三月五十銭乃至四月程度、二番方 三月三十銭乃至三月五十銭、三月八、九月、十、十一月は一番方 二月七、八十銭、三月

以上は戦前までの生活情態である。  
 然し現在の労働者の生活情態は雇用十一一  
 年中日事変後、政府では戦時下増産を叫  
 び国家総動員法、産業振興法と、労働者の  
 負担は次々といふと増重された。

此時下無限の労働者を要求する政府  
 の政策は職業を登録令に依り、労働者の  
 職業を登録し、会社の許可なくしてはそ  
 の職場へ行き出ることには出来ないのである。  
 是れ召集の強出たより労働者の不足を  
 補ふための雇用令と採用し、政府命令に  
 より強制的に労働に従事せしめてゐる。

前増産を計る為労働時間の延長、各  
 職場に管理を派遣し最重なる監視をな  
 し労働者は全く自由を奪われてしまった。故  
 前に依り労働者の自由と労働者の権利は  
 いり初めは莫くなく、強制採用下の東  
 洋は労働者をして深刻な境地に突き陥  
 し労働者の笑顔はもう見ることが出来  
 ない。

一家の支度である親見事は次がうらぐへと戦場  
 に引き出され、侵襲者戦の砲火に食糧となつて

この戦時下、国家に於ける労働者は晝夜連、  
 勤務のため、賃金者は毎日の様に減出して  
 ゐる。この状況、病院では手不足を来し、満足な  
 治療を受けることが出来ず、斯うした悲惨な状態を  
 目前に政府では、やがて職業振興法、たゞ増  
 産だ！と声を上げて叫んでゐる。その反面、賃金  
 強制令を強制し、労働時間には午前六時より  
 午後七時まで延長され、最重なる監視の下に、  
 労働者は全く監視の囚人の同様にしてゐる。

此の情態を強制の中より得た僅かな賃金、  
 強制的に天引貯金や公債をも強制されてゐる。  
 これは大抵、四割乃至五割である。たゞ、公定賃金  
 三月とすれば、実収入は一月五十銭乃至一兩八十銭  
 である。次に物價はどうか、収入額に比較して三  
 倍も四倍も高くなつた。其他衣類、米、油、  
 入札で二回も減へばはるる多くに破れしてしまふ。

斯うした種々な高値のものへ入らず、出費が不  
 慮な供給を待つのみである。而して坑内に於  
 いては、手身標、雑作業が専らである。

半身操縦で汗と涙にまみれ、眠さくばりし  
 晝夜労働し、その労働力は心く搾取され、  
 遂には血の一滴まで搾られ、残骸を行くのである。

# 日本國民學校風景

經本 明

改革の長期化は、遂に日本國內を驚愕せし  
 物質の豊富、物価の高騰、必需品の匱乏にて人  
 民を窮乏に陥れ、凡中も革命の風潮、革命の  
 補正によつて、人民を感正し、こゝろをこゝろに陥入れた。  
 此れが現存の子に於ける革命の社会運動であらう。  
 和は之に、日本社会裏面の二面、一、教育下  
 給けり日本の國民学校教育の根本、一、教育は  
 如何に教育を施し、児童に對して如何に  
 以時休日を強調してゐるのや、と述べて見やう。

## 一 義務教育と國民学校児童

國民学校は明治四十六年度から実施され、  
 今迄の「小學校」の位置を置き取り換へられた。  
 この國民学校制度実施して、日本初等教育の  
 別期は國民学校であることもを強しをたじ。

又政府は、八十年義務教育制度の  
 延長を實施した。何と意味するものであ  
 らうか、一、想起は、日本の見直教育

30  
 は先米如何に天皇制國體の「優越性」と、神

皇座の宣明に集中し、その義務、府所に盡  
 し、日本思想、武士道精神で、大和民族と  
 比較し、外國に對して、民族主義を鼓舞する  
 思想を唱へてゐるの日本人の知ることである。

政府下に在りて、一層頭着てゐる。大  
 學府教科書調査委員會は、日史、修身等  
 の教科書を修せし、對外の地位の認識や海外  
 發展、滿洲國の認識、皇座神座の觀念を  
 強調し、更に「天皇制の優越性」と、大和民族  
 の誇大化し、國民をせしめられた。一、和の大御代  
 と云ふ一語をも強調して、滿洲國の成長、中日  
 事變の展開を新教科として、義務教育を強  
 化してゐるのやある。

政府が長に、國民教育を考へ、大  
 化何年のために八十年の義務教育を延長し  
 た。その際、もつと進歩する教育方針が押し進  
 られる筈だ。義務教育、その教育の口実であ  
 り、義務教育に過ぎない。最近に於ける  
 日本國民の國民学校児童の状況を見よ。

國民学校は長に、國民教育を考へ、大  
 化何年のために八十年の義務教育を延長し  
 た。その際、もつと進歩する教育方針が押し進  
 られる筈だ。義務教育、その教育の口実であ  
 り、義務教育に過ぎない。最近に於ける  
 日本國民の國民学校児童の状況を見よ。

ありてはなにかかり、又新居を移す事なりと云ふてある。國民學校教育の前途は望みの通りにありて普通教育を施す。國民の基礎的練成を怠らすことなし。

又文部大臣岡部長景の公決は、時代の要求を省見の小國家の情實に照らしてのこと。教育にたしむべき時局の要を考慮し、その順で進め

是より、その趣意を、普通教育の外に、訓練、職業科の科目を設けて、訓練科としては軍事教練に當兵を置き、その外、体育、音楽と

計り、博識博聞を培加せしめ、その如く、明らかである。職業科には、音楽、工芸、商會、水産業の

訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

に對し、教育に充てられ、その如く、訓練科では、農業、商業に對して、訓練科は、必要なきを認む。農村には、作物栽培、畜産、養蚕等も、地方の事情に依りて、必要科の一科に充て、職業科等は、必要ならしむるべきに

二、國民學校教育のつて

國民學校は、教育の基礎を成すものなり。其の目的は、國民の基礎的練成に在り。其の内容は、普通教育の基礎を成すものなり。其の教育方法は、系統的、連続的、総合的、實踐的、である。

國民學校の教育は、國民の基礎的練成を成すものなり。其の目的は、國民の基礎的練成に在り。其の内容は、普通教育の基礎を成すものなり。其の教育方法は、系統的、連続的、総合的、實踐的、である。

正科正教員 月給 四五―一五〇円

専科教員 " " 四〇―一六〇円

代用教員 " " 四〇―一四〇円

この四種は臨時生活相談所では全員の生活状況を調査するに困難を訴ふる山村校長に頭を悩まされ、各本専科校長の意見を得て、全山各都市・農村・山村の山村に留つて代表的国民学校教員の半期中の生活報告を集めた。この中から専科三十五人、正科六十人の勤務収入をみた。その中望教員六名を選出し、統計を作成した。収入平均七九五二錢、支出平均九四八錢で、平均二〇円赤字となるも「明かになつた」(東京朝日記者)。

事実二〇八〇円の待遇を受けてゐる教員は、師範学校を出て恐らく十年以上勤めた経験者である。

のである。それであつて、全山二七万五千の国民学校教員の平均俸給は昭和七年以降殆んど衰りなく約百円強の中身教員の半額であつた。現在もこの不景況を達してゐないとは思ふ。何故なら、現在では代用教員の非常に増加し、代用教員の俸給は何人ともわすか三四〇円に過ぎないのだからである。

一女教員の悲鳴……本校の生活は百十時

32 間を勤務にとらえて、自分の時間片断は、三時間しかありませぬ。その上修養費の九月の金さ(俸給)を得

的に思ふは、絶えず不安に駆られながら児童に臨むのは、健康、生活、養育、影響、まうへなくと思ひます。小専科の先生、わけ下り、生活費の生活を正しく認識して、それに対する生活の安定とその特性を認め、改し、ものですしと、これに對して、教育委員、生活指導部の指導、博士、野津諒は、只簡單に国民学校に於ける生活費を減らすとの答へてあつたが、既に国民学校に費するものにも、彼の云つた教員の待遇改善は現在に至るも改善されないの對、却つて更に影響を及ぼしてゐる。

次に教員の質の低下に及んで、感ぜる事柄、その教員不足によるものもあり、召集、軍需工場への転職、これに補ふの代用教員と、女教員の増加と云ふ事である。毎月給でめく者は能力の正確かに、以前に較べて低下してゐることも明かである。甚ださきに至るは、木七人の教員と、本専科卒業程度の代用教員の増加である。

最近の専科では、右名の教員中、正科正教員五、女教員七、代用教員四と云ふ現状である。この専科は、何に教員の不足と質の低下が解かる。

此の様態、教員の不足と質の低下、国民学校児童の現状を顧みると、我が国は将来を憂慮せしむるに足らぬ。

# 太平洋の戦い責任は

## 人々大衆の肩に

溺れる東條の叫び死の叫び

「國民よ！飛行機が足り

ないぞ、飛行機を南洋

に送れ！

あー！もう溺れるんだ。





和乎先鋒友之會總會……一月十九日

第四水橋會に於ける可決事項次の如し

友之會親導部の設立……今迄各班毎に行

はれておにニエノ文親導部はこれより友之會に

統一され迅速正確なる親導部によって、國際間

題に對する認識も更に向上しつゝある。

友之會研究部の設立……これにより友之會

合同研究会が樹かれることとなり、已に其の

第一歩として、日本帝國主義の解剖に鋭い

理論のメスは日本軍閥の心臓部を執ぐり

出しその果番を徹底的に曝露し我々の理

論的基礎を統一しつゝ、たゆまなき前進を積

めてある。

友之會歌制定……第一部は、聯合國歌の

快活なリズムで、友に響小、第二部は、友成

同盟歌「解放之歌」を基用、三朝英呼

前に親先満々たる響が、鎮城の山街を

……

友之會 小又強 二同志進出

日本軍閥の暴行……

無情無義……

彼ら……

……

……

……

……

……

……

……

友之會 親導部 九會……

……

……

……

……

……

……

……

……

友之會 親導部 九會……

……

……

……





# 絆を断ちて

和平村 申允秋

★ 此の一文を侵畧戦争の犠牲となりし全朝鮮同胞に捧ぐ……

被俘より入村当初まで……被俘当時を想起すれば何事も夢の様に日本帝国主義の駆使に甘んじて

は無稽夢中であつた。その後和平村に到り、日本人と共同生活に入り、村内朝鮮同胞覚醒者とも意見を交はし、此の人達の運動を眼前に見て、未だ私は過去を清算し得なかつた。それは、私の心中考へても解き得ない矛盾に逢着してゐたからだ。

迷夢より覚めて……その私に昨年秋より鋭く警鐘を鳴らしたものがあつた。それは日本人覚醒先輩

に依りて侵畧戦線の大同團結と統一の成功であつた。打倒マアソシヨの大旗下で一切の私的な小乘的立場を放棄して、和平先鋒友之會は自発的に結成された。而もその上私の目に驚異となつて映つたのは、新進班研究部が決

まとい革命的精選と努力の姿であつた。此の人達は日本革命のために決死の背水の陣を布いてゐる。特

に會員の相互練磨として其の嚆矢も許されぬ赤煉瓦反

36 同志の眞実性は私の胸を打つた。その強烈な意志

に頭が下つた。私は自分が恥しくなつた。

民族战士としての門出……此の様にして、

私の民族意識、好悪はる日本軍閥への憎悪心は猛烈として起きた。あゝ、そのために韓島の先輩が既に流血の闘争を敢行してゐるのだ。私は直に村内朝鮮同胞と協議した。同胞達は相呼應して激起してくれた。とりあへず新進班研究部と平和連、長谷川、江見、青木、諸先輩の協力をよつて我々の革命的力量發展の第一歩として合同研究会を立案することになつた。我々は全く一年生から勉強する決心なのである。幸に友の会百数十名の日本人、台湾の同志は我々を萬雷の拍手を以て迎へてくれたのだ。我々は着々と工作を進んでゐる。

全朝鮮同胞よ起て……同胞よ、我々は

偉大なる中国抗戦を導くべきである。以後朝鮮解放は既に保證された。韓国臨時政府は中国後助の下に堂々と闘つてゐる。同胞よ絆を断ち、迷

夢より覺悟せよ！我が自由の樂園は近し。(次)

# 臺灣の沿革と解放運動に就て

林 雄 光

親愛なる同胞諸君、日本の宝庫と稱せられ、其島と讃はれてゐる台湾の日本帝國主義者に奪はれてより、早稲四十九年に重くしてゐる。顧みるに、我が台湾が祖國同胞に発見されたのは、遠く隋朝時代に溯り、我が台湾が中華の領土に属するは西紀一千三百四十餘年の昔の事であつた。宋元明清の時代に我が祖先が統々と台湾に移住し、特に清時代に至つては移住した者が廣東方面が十分の三を占めてゐる。其の他は福建の泉州、漳州、西府から移住したのであつた。

顧みるに、明末清初の時代には我が同胞の如く、神の如く尊敬してゐる鄭成功將軍が異族侵略者たる荷蘭人を駆逐して、我が土地を完全に光復したのである。

鄭將軍が台湾で薨され、更に清の時代に於り台湾を一行省と設け、以て一般に「行省」と稱せられてゐる。當時最も秀れた統治機構を設け、所謂善政時期と稱せられたのであつた。にも拘らず、甲午年（一八九五年）中日戦役で敗れ、馬関條

たのであつた。当時我が台湾同胞が帝國主義者に奪はれ、極度に憤慨し、清廷に對して、其の代價を我が同胞に負擔して貰ひ度いと哀願し、然し我が台湾同胞は英雄抵抗し、一方には鄭逢甲、唐景崧兩將軍を擁護し、憲法起草と共に台湾民主國に變革する政体となり、其の結果唐景崧は大總統に鄭逢甲は副總統に當選し、以下軍務大臣李秉瑞氏、内務大臣俞明震氏、外務大臣陳雪村、遊説使姚為禎氏、各任命し、更に一致團結し、日本帝國主義者と強烈なる抵抗を續けたのであつた。遂に八月に台湾は陥落し、我が宝庫は既に日本帝國主義者の鉄蹄の下に蹂躪され、一般民衆は牛馬の如く奴隷生活をして来たのであつた。永樂四九年苦心慘澹、以て築いた台湾は更に日本帝國主義者の為めに搾取、掠奪されたのである。

將委員長は、中山之命運の中に台湾の目前に存する重要性を強調して、台湾の光復を以て表す所である。尚、建都に於ても同胞の意志を表示して居る。我が親愛なる台湾同胞諸君、自由解放のため

# 門山の後

## 五 演習



則賢川市

戦車に乗った私等は、抗州の兵営を  
出陣し、そして寛橋の飛行場に向った。

此の飛行場は抗州市街から西九八軒の地裏に  
ある。(詰が大分横道にせれるが、此の寛橋の  
飛行場は其の面積二里四方、その他、練兵場を  
併せれば四里四方あり、箇格納庫は殆んど兵器  
及び彈藥庫に使用しており、常備機数は二  
十機である。

尚、作戦時に於ては、五十机或は四十机位は備え  
てあることもある。

一昨年(昭和十七年)五月の金華作戦時に於ける  
飛行機部隊は皆此の飛行場より出動したも  
のやある。

やがて、操縦演習が終つて、歸營した頃は、午  
后四時を廻つてゐた。直に兵器の手入れを済ま  
せて、夕食に就いた。舎内当番の私は、食後の掃

がせ、と古年兵が信へて来た。私は早速、教  
官室のドアを開き、ノックした。第一、市川参り  
ました。

「カン、は入れ。」 私は今日教官と呼ばれた  
事情は、甚だの事件が、何か複雑な問題になつ  
たのだからと直感した。教官は私を見て、「まあ  
市川、立って居らんとせぬ」と云つた。私は暫か  
に腰を下ろした。そして教官が何を言ひ出すか  
と待った。

「市川、今日の午後の演習、整列の時、何故  
山下軍曹に向つたのか。教官は、お前が山下軍  
曹に手向かうたことに付いては、大概知つてゐるが  
まあそれは、それとして、まさか山下軍曹を殺すつ  
もりがやなかつたらうナア」と言つた。

私は「いや違います、市川は本身に山下軍曹を殺  
すつもりでやつたのです。それはあの時は、祭作的に  
行動したので、一時的の興奮の爲にやつた様です

です。と云つた。そうか。それか。お前は軍法會議に選ばれると云ふことを知つてゐたのか。

「無論です。市川は重富倉倉や軍法會議に選ばれる位のことだ。恐ろしくて、事實を否定したり、間違つてゐることを正当だと云つて肯定することは出来ません。」

「教官殿は日本の軍隊が正義の爲に平小事の譽を感して一生懸命やつて来た積りで、市川は正義の爲には生命も捨てる平小決心があります。」

「それは本當か。市川は嘘は言ひません。そうか。良く判つた。市川、お前は良い度胸だ。その氣持をソコキも捨てないで、今後、御國の爲に大にたやつてくれ。教官は、唯だ、お前がそんな氣持である。聞いて見たかつた。お前なんだ。何も心配する必要はない。今日は帰つてゆく。リ休め。ハイ、そうでありませぬか。第一班市川帰ります。ウム。私は此の教官の言葉に對して半信半疑で内務班に帰つて来たのだつた。」

六 隊長の言葉

内務班に帰つて来た私を見ると同年兵は心配せうに均しく、オイ市川どうしたのだ。と訊ねる。私は平然として、お今日の事件について少し教官に訊ねられただけなんだ。と答へた。同年兵の三四人はよつて来て、オイ市川、軍隊生活には苦しいことは存々ありか。ちん

ちんちんか、オ市川、余り興奮して、上官や同年兵に手を出さない方が良かった。と言つてくれた。皆に心配をかけた。皆に心配をかけた。私は心の巾でもむつと割の事を考へてゐたのだ。皆の顔を見ると、ついそんなことを云はずにはおれなかつた。

私は独り、今日の事件について考へて見た。然し今日の行爲は、どうしても間違つてゐる。これは思へなかつた。若んご毎日の如く上官は兵隊に對して全く積累な態度をこつてゐるんだ。私が内地に居る頃見聞した軍隊と金々違ふ。而も陛下の赤子だ、五ヶ條の教訓だとか、眞實面目な顔をして唱えてゐる彼等、上官等は毎日を

やうであるんだ。中國人を捕えて金儲をやつたり、毎日の様に酒を飲んで、慰安所廻り、等許りして、お前も眞實面目になつて、死か皇軍の向ふ所、敵なしとか、聖戦に破るゝは暴虐の敵とか言そ

有頂天になつてゐるが、實際上官等は、そんな氣持でゐるのか。さつぱり判らぬ。私は何時か舍前の窓にもたれて、軍隊生活の余りの矛盾のはけしき、口惜さか、こみよつて来て泣いてゐた。上官リ、と言

ふ言の事には驚いて、私も狼狽して、不動の姿をこつた。山田伍長である。オイ市川はあんなか、彼は言つて入つて来た。私は又何かあるかと思つて、

ハイと答へて早速隊長室に赴いた。そして私は隊長室のドアをノックして隊長殿、第一班市川参りました。と言つた。入れと言ふ隊長の言葉で私は中に入った。隊長は市川が、まあ判りて話せと言つて、私に椅子を進めた。私は静に膝を下うして隊長の話を聞いた。隊長は、今はお前は山下軍曹に、銃剣で飛びかゝつたと言ふが、その誤は、先刻中島少尉から聞りて判つた。お前は本當に山下軍曹を殺すつもりをやつたのか。と言つた。又隊長は、お前が、お前は人を殺せば、自分はどうなるかと言ふことを考へて見たから、私に訊いた。

ハイ市川は山下軍曹を殺して自分も死ぬ積りでやりました。アームセウが、然し市川、お前がやしたこと隊長は悪いとは言はん。そう言ふ氣持で今殺したにやつて、貴はねばならんが上官に對しては、……と隊長は口籠つた。私は、隊長殿、悪いことを悪いと言つて指摘することや、又正しい者に由連つた處を暴行する時は当然正しい者が反抗するまじと思ふますか。日本軍は正しい事の爲には人も殺さんやせよ。市川

弟が昨年十二月五日、此の部隊に編入された。隊長殿は此の處で、お前は二十六日一年に入つた。最も優

やつてくれ。と言はれました。市川は隊長殿の言葉を信じて一生懸命やつて来ました。そして高嶺で、とうする私を隊長は止めて、もう良い、お前の氣持は良く判つた。隊長はお前の様な元氣な兵隊が、隊に居ると思ふと、金も頼もしい。お前は既に二十六一年の優秀な兵隊だ。今日隊長が、お前に頼みたいことは、今後その氣持を、そのまま捨てなで、大いに敵と戦ふべし。何も心配することは、ないんか。から明日、ソツモの様にやつてくれ。良いか。と言つた。そして、軍曹に、あつた慰問袋を私にくれた。私はその慰問袋を貰ひ、隊長殿の言はれることは、長く判りました。市川は今、彼も一生懸命やります。と言つて、隊長室を出た。

私は今日の教官や隊長の言つたことが同じことであり、何の爲に教官や隊長は、あんなことを言はねばならぬのか判らなかつた。私はこの隊長や教官の言葉に、アツ考へて見た。私としては、当然、少くとも、軍曹倉に入られると思つてゐたのに、……却つて教官や隊長は私のやつたことを讃めてゐた。そして、今後、その氣持を失はなで、大いに戦ふべし、と言つたが、……私はこんな事を考へて、内務課に申つて来た。

班内は、もう日々、兵隊の準備が、怒つて、各隊友は、要呼を受けざる、整理してゐた。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

# 古本屋の日記



異常科を卒へた私は、上の学校へ行きたくも負  
 乏を以てそれを出せず、所へ小僧奉公に出された。

その町は織物の盛んな町だった。その工業生産品  
 の総てが織物だった。織物工場は数に非常  
 に多し、その町の鉄工所等は織物工場のため  
 設けられ、又旅館や自動車会社等も、織物の  
 取引に由来するものために設けられてゐるとも  
 も良し程だった。従つて生糸同屋も相多かつ  
 た。私はその中でも余り大きくない生糸同屋に  
 小僧として奉公に行つた。

私の仕事としては、ラビオのレシメーを耳と  
 ある、時間々々放送される生糸の相場を  
 書き込むのが日課の一つだった。最初はさう  
 いたり、同屋へたりして叱られた。そしてその  
 度々地所の同屋に用事にやらされた。その他

の仕事としては、注文された生糸を銀行の倉  
 庫から運い出したり、停車場へ着いた生糸を  
 銀行へ運んだりするのだった。それは何欠の  
 同屋でやつてゐる事だった。その生糸を銀  
 行に預けることによつて、それを抵当にして  
 金を借りるためだった。だから銀行の幾棟も並  
 んで居る倉庫は、皆各同屋の生糸で一ぱい  
 だった。そして同屋は自分で倉庫を持た  
 ず、又店にも糸を置かず、銀行の倉庫に  
 を利用するのだった。

私はさうした生糸運の居る時、母は子守り  
 をさせられた。私は子供を連れて本屋へ行つ  
 て本を讀むのが樂しかった。東京寺では  
 是かけることは出来なかつた。田舎の本屋の前  
 は、本を見たくも金のない小僧連中が、

毎日の本屋へ通った。私もその中の人として

或る日のこと、私はいつもの林に子供を負つ

て本屋へ行った。いつもは多勢の少年達が

おろのたにその日に限つて入るものがあった。

私は少し早送されたかな？、しとは思つた

が、そのまゝ少年雑誌を読んでゐた。すると

と奥から一冊の本を手にした方が横をなが

出て来て、

「お前さんは何處の小僧さんかい？」と訊

ねた。

「丸美屋の小僧です」と答へると、「お前

さんは大方本が好きらしいね。この本を持て行

つてお読みしと云つて手に持つてゐる本を

差し出した。部厚な本だった。

「お金がありませんかい？」と云ふと、「お金

なんぞ何時でも良いんだよ。それまで貸して

て上げるから」と云ふ。私は欣しかつた。け

もとうとう手を出さずには出来なかつた。

眼に一滴の涙が溜つて来ると私はたまらなくな

つて表へ飛び出した。

店へ帰つてからあのお内儀文の夏袴を考

へてみたが、お内儀文の夏袴を考

へてみたが、お内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考

おつてもりてゐた。そのお内儀文の夏袴を考





邊は警察に頼んで私を掃すに違ひない。そのとき私が金を返せなければ当然連ねられてしまふ。さう考へると私は逃をくしはつても本舞する外なかつた。金と、金と金が私を縛る鉄鎖だつた。

その頃主人はやつと十三位になつた小僧に向つて「巡査が来た。お前はさうかゝるんだよ。若し見つかつて困つたら、伯父さんのところへ遊びなかり見習ひに来てゐるんですよと云へると云つて居た。それは高法がやがましいからつた。成程その小僧は主人の遠縁ではあつた。然し実際は遊びながらの見習ひで居なかつた。手でもまゝくして居るは道々頭へ染筆が飛ぶのだ。それから私達に向つては、若し巡査に聞かれたら、職人は夜業しても、私達は六時に終りますと云へと云つてゐた。然し実際問題として、小僧が職人より先に休める筈がなかつた。職人は自分の仕事が終わるとさつきと風呂へ入つて飲つてこまひ。それと若しそれを止めた。機械で絞つたりする。それを今度は小僧が全部乾かして上げてこまひは飯はならぬのだ。おかしな冬は性しい時期等、小僧の仕事が終るのは毎晩十時過ぎだつた。

44

斯うした中では小僧は勉強を強ひられた。主人は小さい時小僧をして職人となり、農具農具を

職人や若し農具が入るまで居る間に、真鍮や焼酎をききせられた。然し疲れてゐるので頭へ入る程なまはなかつた。それが清んでから風呂へ入り、釜場では暖めたりして居る。少しも一時逃がらなかつた。それでも朝は早く起きて、職人が来ない前に、釜場を運んだり、染筆を掃がしておけばなまなかつた。

でも夏は比較的暇だつた。明々い間に片付けて、六時か七時から休んだつた。だが、読書が好きを早くさせられた。それが清むと乾場で踊んだ。疲れた体で、櫛干にもたれて、星を眺めてゐると生乳を判らぬ。父母悲しさに泣けて来るのだつた。その内私は肌違の方に退された。出来上つた品を得意先の高（配達する役である。初めは苦しかったが馴れたら結局その方が楽だつた。その内オート三輪車を使ふ所にたつた。主人は私に免許証を教ふる様になつた。その頃は警察署へ行けば免許証を交付する。私はオート三輪車に乗つて、道を練つた。さうしてゐると方々の壁に、小型運転手入用貼紙を見つけた。それには依ると大抵は必だつた。そこへは月給三十元位、通ひで五十圓のもうである。私は今の自分について考へて見た。私は免許証を持つてゐる。少し位の修理は出来る自信もある。

たかしの借入は、大半年、三百圓、それを月に改め  
は、一俵、くらたなるのだ、而もその金は、伯父夫婦  
の手に入つておきた。いは、私は、一俵、何人のために  
切つて、おろした、う、う、う、

私は、直ぐにも、貼紙のしてある、二、三、行、子、同、い  
合せて、おたがつた。然し、上京、当時、考へた、ことが、お  
とらつて、私は、実行、せなかつたし、封、達、封、に、観、念  
かけられて、居る、私の、頭、では、契約、を、破ると、おふ、こと  
が、所、か、恐、ろ、い、こと、の、林、に、考へ、う、れ、て、大、張、り、実行  
せなかつた。その、内、外交、を、やつて、おた、人、が、販、を、取  
つたので、私は、その、人の、後、を、経、つて、外交、を、せ、ね、は  
まらなかつた。だから、今、度は、種、々の、見、本、を、持、つ  
て、注文、を、とり、に、飛、び、廻、る、のが、主要、の、仕事、とな  
つた。それ、には、他所、の、外交、員、との、教、訓、を、競、争、も  
せ、ね、は、な、ら、な、かつた。そして、従、来、の、配、達、も、自分、で  
せ、ね、は、な、ら、な、かつた。私の、仕事、は、益々、忙、し、な、つた。

その頃、から、主人は、私を、大人、に見、せ、や、う、に、して、  
髪、を、伸ば、させ、煙、草、も、吸、せ、た。しかし、漸、く、月、一、回  
から、一、回、三、三、や、美、に、な、つた、は、かり、の、小、使、で、どう、して  
煙、草、を、吸、ふ、こと、が、出来、や、う。床、屋、へ、行、く、事、も  
丸、坊、子、の、間、は、三、三、や、美、が、三、三、や、美、で、済、んだ、然、し、  
頭、を、伸ば、せ、は、四、十、美、な、り、五、十、美、掛、は、ね、は、な、ら、  
ぬ。而、も、今、迄、の、様、に、月、に、一、回、と、お、し、沢、村、に、は、い

かぬ、少、く、とも、二、週、間、一、回、が、二十、日、に、一、回、は、行、か  
村、は、な、ら、な、かつた。それ、に、人、が、行、け、は、た、ま、に  
は、恐、動、も、見、た、く、なる。録、日、に、行、け、は、し、る、こ  
の、一、件、も、余、計、の、せ、く、なる。と、ん、な、に、し、ても、小、使、者  
は、是、を、察、か、つた。而、も、パン、ク、代、を、支、持、お、世、の、金  
は、何、時、も、持、つて、お、な、け、れば、な、ら、な、かつた。だ、か  
ら、私は、主人、の、所、へ、公然、と、床、屋、錢、や、煙、草、費、を  
お、せ、り、に、行、う、た、こと、も、あ、つた。

私は、子供、の、頃、から、背、は、高、く、な、つた、ので、年、  
は、三、つ、位、は、こ、ま、か、す、こと、が、出来、た。然、し、年、は、こ、ま  
お、せ、ても、無、事、の、私、が、学校、出、の、人、達、と、競、争、す  
る、こと、は、困、難、だ、つた。

或、ろ、と、き、不、辨、手、形、を、知、さ、れた、こと、が、あ、つた。  
主人、は、私、は、な、ら、な、かつた、に、思、ひ、又、嘆、いた、し、然、し、私、に  
い、う、す、る、こと、が、出来、や、う。その、時、は、己、に、相、入  
経、營、だ、つた、相、手、の、工場、は、名、義、主、兼、て、合、資  
社、に、な、つて、お、た、だ、から、今、まで、実行、した、小、切  
手、や、手、形、が、全部、不、辨、に、な、つた、のだ。

私は、こ、こ、し、は、東京、如、恐、ろ、く、考へ、ら、れた。そ、れ、を  
私、は、田、舎、の、こと、を、考へ、て、見、る。伯、父、は、その、父、の、代  
りに、無、事、と、か、何、と、か、の、特、許、人、として、格、納、し  
た、ばかり、に、少、し、は、お、し、あ、つた、田、舎、も、他、手、に、渡  
し、そ、れ、でも、足、り、者、に、毎日、川、上、に、送、り、過、す、小

てゐるのだ。その脅威私の前借だけでは足り  
ず、私の借銭まで無心して来るのだ。考へると馬  
鹿なことをした。一方には僅かばかりの利息を支拂ひ  
に困り、お水も飲むのを止したり、せんさいを

お金のを止したりしてためた僅か三円や三円の金  
を無心する祖父、又一方には何万、何億と大金  
を名儀一つ賣（る）だけ何も云はせぬ貸本家  
その差は余りに大きかつた。

私はその頃から主人が妻の名儀や中学一年生の  
息子の名前で預金しており、それが商賣上の金と  
は区別されてゐることを知つた。向もなく預金は  
合名会社になつた。去小までむなく付まで履行  
した事柄は平持ひとなつた。然し如何なる債権  
者も弟の名義になつてゐる工場や、機械に手  
を付けることは出来なかつた。妻や子供の預金に  
手を付けることも出来なかつた。

46 愈々私の満期も来等となつた二十五年の年、  
故郷から祖母が「東京見物」に出て来た。いつ  
も口癖の様に東京へ行きたいと云つてゐたので  
私が呼び寄せたのだ。私は暇をつくつては、東京  
市中を引張り廻した。ある時は配達のついで  
に運賃用のカゴトサフに乗せて歩いたこともある。

くたに、未練のお蔭で京都にも行かず来た。し  
今度はお前のお蔭で東京も見物させても  
らつた。もう永くで死んで思ひ返すことはなほいと  
云つてゐんだ。

愈々満期の目も近づいた。私の期限は夫役  
検査迄だつた。だから検査の知らせが来て、その  
期日が判る所になつてもうを長くして仕事  
も手につかなくなつた。「お前がゐると後が困  
るから」と云ふ主人の言葉の意味は判るのだが、  
百でも余計に仕事をさせやうとすな妻は増が天。

帰郷の前日私は得意先さを暇乞に廻つた。  
得意先の前には鉄別を呉れた所もあつた。私は  
解散された籠の鳥の様にをこらうを尋ね廻りたかつ  
た。思へば天年向隅に下り、苦勞として  
来た小唄も今日でお別れだ。私の大地を踏み  
しめる足は軽つた。愈々帰郷の日主人は私に「高  
懸鉄」と云つて五十円ばかり入れてくれ、その他賞  
手だとか何だとか云つてお金の金をくれた。私は  
来てもう金の大小等問題としてお水なかつた。  
「自由の身になつた」とか羨しとしていそくと列車に  
乗り込んだ。やがてベルが鳴つた。  
「検査が済んだら又来てくれよ」と云ふ主人の事  
無心に頭を私の心はいつか故郷にとんぼお水。

隨筆

一年を顧みて

新井 敏 男

忘れぬこの出来ぬ三月十五日迄である。この二三年の革命の歴史  
 此革命の同志全和軍村訓練に使用され入隊した日である。  
 我々も人勝の先聲を享受するに務むべきに思ふのである。  
 今僕は一筆を提起して思ふ。

巨漢軍限り、山岳に回つた。鎮座にも春が来を、空は晴れ  
 て野は若草の芽は出て、人間の気持も変わる時期本村に到  
 着し、その尙南現在の戦争はいつてまだ理解し難い。兵は多  
 くあつた。収容所に到着以来下りやりの普通の私生活だ。  
 然から今から考へると全く馬鹿々々しいことでも、正しいと思つて  
 るた。

其の後同行の長谷川少尉や長功作成の犠牲者等の流合に  
 依つて新生理が組織された。私も兵は少が、新生理の第一  
 生舞臺に努力し、その代表者にも選ばれた。新生理は  
 の教育者にも押されて、中ではあつた。

任勞の暇々に訓練班の同志より、日本人としての自覚の内  
 能等を説かれ、全くその説に感服される所が多かつた。

此時我々の身辺に於て、かうした兵は、  
 余り云々考へず、少くも、  
 三本

と生死を共にする決心の下に入隊することになつた。  
 幸に前成以来の同行の長谷川君等や新生理全員の存在する  
 理解と敬慕を受け入隊式の翌日は全員の指揮と万雷の拍手を  
 受けた。ある感激的の情景は所聞談以來初めて見た。官理  
 其の請しであつた。

入隊以来の僕にまつて苦しみ、少しはあつた。それは今迄友達で  
 あり、同志的の熱がある。苦工する者か少くあつた。それは何より  
 兵隊の儀にまつてあつた。今つは李開的の精神もよく、兵隊  
 兵隊で、氣にまつて兵隊の年事に二兵卒として全力を盡し得るか、  
 いかんやであつた。しかしそれは自命の獲得であつた。人間は

力次第で出来るのだ。それは出来ぬ。しかし、  
 金も無い。親、兄弟が、悪く、ない事、債には、  
 果敢が、  
 ある事、  
 と、  
 るやうになつた。

我々の事になつて、我々の身辺に於て、  
 三本



友に...  
 5 | 565432 | 1505 | 123432 | 50 - 5 |

565432 | 1501 | 432542 | 10 - 1 |

2.2 3.6 | 5341 | 60 6 0 | 50 - 1 |

4.4 1.6 | 5365 | 40 2 0 | 10 - 1 |

不  
 くに... から...  
 とあ...

一 屍滿つる山河

悲し哉才筆...

晴之日の旗才...

舞は水じ故郷

花りにばたがく

自國の旗

天がうまを...

我が降位

こりて見え...

挙げし我が旗

おごも...

戦列は...

扇原...

銅と丸

鎖断つ...

走録...

原作史上歌又

# 編輯後記

航制下の日本國民生活の實態を知る  
爲に國民生活層の事實を基めて見  
更に徹つて日本の經濟的基礎が如何に動  
搖してゐるかを知られると感心

是は實に日本人民の切實な生き残  
警告である

本誌は今後から日本ファッショの裏面  
を突いた露露的半露に重責を担ひ  
つゝもりてゐる。而して本誌が同盟倒幕に  
中國抗戦に對つては實の協力者であり  
實に實にして勇力敢なる日本人民のファッショ  
露露に對する反抗確證であることと承す  
であらう。

諸君は本誌が日本人民の誠實と労苦  
の結晶たるを諒として、不備不足を寛容  
せうれんことをお望む。

編輯室

告  
本誌の編輯の文章は、  
希望の場合には必ず  
その趣意を傳へられたし。

隔月發行

## 和平先鋒

第一卷  
第四期

民國三十三年三月五日發行

編輯責任者

長谷川敬

印刷

責任者

舒慈僧

印刷所

和平先鋒社印刷局

發行所

和平先鋒社

社長 莫敬儂



